Red Planet

ビショップ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類が火星を第２の地球に作り直して数年。
人類は３度目の世界大戦を戦っていた。
９千万人の死者を出した大戦を終えてなお、
大戦から飛び火した火種は紛争に姿を変えて
世界で猛威を振るい、
おびただしい数の難民を生み出した。
そしてさらに数年後。
忘れ去られていた火星移住計画が再開され、

難民たちは半ば強制的に移住させられた。

この作品だけは真面目にｗ
感想、指摘メールお待ちしてます。
オブラートに包んでお送りください。

目次

プロローグ
負の歴史 ―― 1
オッドアイの傭兵
1「傭兵の日常 1」―― 6
2「傭兵の日常 2」―― 14
3「Pest Control」―― 22
4「疑惑」―― 30
5「濡れ衣」―― 38
6「プロジェクト2056」―― 47
7「大脱出」―― 58
8「対空戦」―― 65
9「death race」―― 85
10「砂漠の海兵たち」―― 92
黒き正義
11「バディ」―― 101
12「殺しと金と正義と」―― 110
13「偽られた罪」―― 120
14「殺しと金と正義と」2 ―― 144
15「殺しと金と正義と」3 ―― 159
16「殺しと金と正義と」4 ―― 168
17「再会」1 ―― 175
18「再会」2 ―― 188

プロローグ
負の歴史

俺は古い電子端末のくすんだ画面を
何度かタッチして録音データを再生した。
もう何度も聞いて内容は暗記しているが、
辛くなった時にこうして聞くと
父さんが側にいる気がして落ち着く。
椅子を動かす音や
古いライターに火を付ける音が聞こえて、
ため息とともに話は始まった。

『そうだな・・・　まず向こうの話と
俺の身の上話をしようか。
俺が産まれたのは２０３５年、
そうさ、第三次世界大戦の真っ只中だ。

戦争は２０５０年に終わったが
紛争とかテロは俺が産まれる前から
減るどころか増えたらしい。
それであんたみたいな
難民の数も上昇の一途を辿った。
大戦で経済が疲弊した先進国は
次々と受け入れ拒否の政策に転換していく中、
彼らが目指した場所は日本だった。
あんたも来たんだろ？
俺か？俺はお袋が日本人だ。
親父はアメリカ人。
２人とも死んだけどな。
俺が育った日本は大戦の影響を受けなかったが
人口減少は昔っからの悩みの種らしい。
それで難民を受け容れてた。
だが彼らの希望の星はあっさりと
地獄に変わったよ。

日本政府は一定の労働者を受け入れると
それ以上は火星移住計画の実験体にしやがった。
無慈悲に火星へと送り込まれた彼らは
数十名の日本人宇宙飛行士とともに
月に送られ、巨大な宇宙船に詰め込まれると
氷漬けにされて火星に送り込まれた。
ん？お前は宇宙飛行士じゃ無いだろうって？
まあ落ち着けよ。今から話す。
親父と同じ軍人としての道を選んだ俺は
数年後の火星移民募集に自衛隊を辞めて応募した。
あ、そうか…自衛隊ってのは
日本の国防軍みたいなもんだと思ってくれ。
今となっちゃ頭がおかしいと思うよ。
ああ、笑ってもらっても構わない。
でもそん時の俺には失うものが無かったんだ。
親父は大戦で行方不明、
お袋は出張先で起きたテロで死んだ。

幸か不幸か、見事合格した俺は
難民たち同様に氷漬けにされてここに来た。
ここの第一印象か？
そうだな…最悪…かな。普通だろ？
でも人間誰でもそんなもんだと思うぜ。
そっからの人生はみての通りだ。
今じゃこうして傭兵生活だ。
ここには軍隊なんてねえから
なかなか儲かってるよ。
それじゃあもういいか？
この後は害虫駆除の依頼が入ってんだ。
すぐ戻る。』
どうして録音したのかはわからない。
でもこの端末は母さんが遺した唯一の形見で、
この録音データは父さんの生きた証。
他人から見ればただの骨董品だが
俺にとっては大切な宝物だ。

俺は録音が終わると同時に
ＡＫ―７４の組み立てを終え、
マガジンを挿し込むと肩に下げ、
録音データの中の父さんと同じように
火星産の巨大昆虫の駆除に
向かうために家を出た。

オッドアイの傭兵

1「傭兵の日常　1」

いつものように俺は一仕事終えると、
ＡＫを背中に背負ったままで
友人が経営する酒場に向かった。
ボロボロの扉を開けて中に入ると、
俺と同じように背中にライフルを背負った
集団が先に飲んでいた。
俺はその集団の後ろを通り過ぎると、
サングラスを取って
バーカウンターにつき、
子どもの頃からの友人、アーガスに
ビールを頼んだ。
数秒でビールが出てくると同時に
背後から声をかけられた。

「おい、そこの火星人。見ねえ顔だな？」
俺は面倒なことに巻き込まれ、
店に入った事を後悔したがいつも通り無視する。
「聞いてんのかテメェ!?」
また話しかけられるが、
俺は自分に対する興味を失ってくれる事を
祈りながら無視する。
「舐めやがって…」
俺は背後から肩を掴まれ、
声の主の顔をやっとおがむ。
妙に態度のデカいそいつは日系人だった。
「なるほどな…」
などとボケた感想をこぼしたのには
ワケがある。
父さんの録音にあった通り、
この火星を開拓するときに
難民たちを助けたのは日本人で、

その二世の彼らはいわゆる上流階級だが、
簡単に言えば調子に乗ってるだけだ。
「俺になんか用か？」
俺が振り返ると、
日系人は顔を一瞬硬ばらせるが、
やっと会話が進み始めた。
「はっ…ははっ、オッドアイか。
おいみんな、コイツ人間じゃねえぜ。」
「言いたい事は終わったか？」
ビールがぬるくなる前に飲んでしまいたい俺は
会話の終わらせ方を模索するが、
どうやら相手を怒らせただけらしい。
「あんま調子乗んなよ？ぶち殺すぞ。」
俺は殴り合いに備えてソイツの武器を
把握するために視線を動かす。
背中に下がっているＳＡ５８は
かなり雑に扱われたのか砂まみれで、

腰に視線を移すと拳銃は無く、
その代わりに刃渡りが４０ｃｍはあるナイフが
ぶら下がっている。
「そんなつもりは無いが、
怒らせたなら謝っとく。
それじゃあ俺はもう酒を飲んでいいか？」
ソイツに背を向けないように
コップを持った俺の手をソイツが弾き、
俺の手から離れたコップが
甲高い音を立てて割れ、
入っていたビールを床にブチまけた。
コップが割れた音を合図にしたように
ソイツの連れ５人が一斉に立ち上がり、
俺の目の前に立ちはだかる。
「この場合お代はお前持ちか？」
「ざけんなよ…。」
ソイツは腰から銀色に光るナイフを

抜くと、俺に向けてくる。
こういう状況になっても止めない
バーテンダー兼友人はどうかと思うが
いつもの事なので気にかけず、
乱闘になる前に一応相手に断りは入れておく。
「別に殴り合いをしたいってわけじゃ
ないんだがお互いに引き下がる事は
出来ないのか？」
「んなもん知るかよ、死ねッ！」
解決策を提示したつもりだったが
あっさりと無視され、
ソイツはナイフを突き出してくるが、
俺の目にはスローモーションのように映る。
ゆっくりとこちらに向かってくる
ナイフめがけて俺は椅子に座ったまま蹴りを入れた。
ナイフはソイツの手から離れ、宙を舞う。
そのままの勢いで

俺に向かってくるソイツを俺は躱し、
ソイツの頭をバーカウンターに叩きつける。
落ちてきたナイフをキャッチし、
さっきまでナイフを握っていたソイツの
右手に突き立てた。
「ギャアアアアアッ!!」
「うおッ!?」
「早い…!」
耳障りな悲鳴が響き、
ソイツの連れが驚きの声を上げる。
「いいか?
俺はこの店の常連だ。
初めて入る店では常連客に
行儀良くしろこのクソッタレ。」
俺はソイツの連れを見回し、
「他に礼儀について俺から
指導を受けたいヤツは前に出ろ。」

と一言言うと、
連れの５人は揃って首を横に振り、
慌てて店を出て行った。
俺は右手にナイフが刺さったままの
男を引きずって店の外まで行くと、
ポケットから財布を抜き取って店に戻った。

「騒がせたな、迷惑代だ。」
俺はそういうとさっきの日系人から
抜き取った財布の中身をアーガスに渡す。
「いい加減静かに飲んでくれないもんかね。」
「言っとくが俺が悪かった事は
一度もないぞ？
俺は手を出されるまで何もしてない。」
「確かにそうだけどさ、
おっかないつって誰も

来なくなったんだよね。」
「それはお前の集客力の問題だろ。」

2「傭兵の日常　2」

アーガスの酒場で日系人と喧嘩した翌日、
俺はこの火星を支配している総督府からの
依頼で監視任務の準備をしていた。
車庫のＬＳＶ（軽戦闘車両）に
かけてあるシートを剥がし、
必要な食料や無線機、武器弾薬を積んでいく。
エンジンをかけ、
まだ日が登らない街中を
アーガスの酒場に向けて走った。
俺が半年前に弾痕だらけにしてから
未だに修理されないボロボロのドアを
開けて中に入ると、
店の奥からアーガスがやってきた。
火星出身者特有の赤目を持つ彼は

寝起きなのか、
不愉快そうな表情でやってくるが、
俺を見た途端にいつものアーガスに戻った。
「まったく・・・　朝の5時だってのに早いねぇ。」
「ああ。
申し訳ないんだが仕事で
1日くらい家を開けるんだ。
警報装置と鍵を預かってくれないか？」
「わかった。
でも2日経っても戻らなかったら
欲しい物もらっとくよ。」
「好きにしろ。それじゃあ頼んだぞ。」
「おーう、頼まれた。」
俺は寝ぼけた友人に
いつも通り家を任せると、
店を出て再びＬＳＶに乗り、走り出す。
宇宙港や総督府が集まるここ

エリア０１は平坦な平地に作られているが、
百ｋｍほど南に行けば峡谷があり、
地球から人間と一緒にやってきた
昆虫たちの巣窟になっている。
ただの昆虫なら問題は無いのだが、
火星で変異して巨大化したため、
人間を襲うこともある。
定期的に規模を把握して
駆除しなくてはならない。
その規模を把握するという仕事を
受けた俺はこうして何にもない火星の大地を
ただひたすらバギーで突っ走っている。
最高速度ギリギリの時速１００ｋｍで
砂漠を走ること１時間強。
俺はやっと峡谷にたどり着いた。
荷物から水筒を探し、
一口飲むとチェストリグのポーチに

押し込んだ。
ＬＳＶを降り、荷物が入ったバッグパックを
背負って歩き始める。
移動しながらＡＫ―７４の
コッキングレバーを引き、
もう一度チャンバーに弾薬が
装填されている事を確認し、
セレクターレバーをセミオートの位置に移す。
周囲を見回すと、遠くに砂嵐が見えた。
「チッ・・・　さっさと終わらせよう。」
俺は峡谷の淵に移動し峡谷を見下ろすと、
峡谷のところどころに穴が空いており、
そこから何匹もの（サイズ的には頭だが）アリが
出入りしていた。
俺は地図とメモ帳を取り出し、
巣の入り口の位置やアリの大きさ、
１分あたりに出入りするアリの数などの

チェック項目を手早くうめていく。
砂嵐の位置を確認するために
もう一度周囲を見回すと、
数百m離れた位置に人影が映った。
向こうは俺と目があったらしく、振ってくる。
おそらく同じ依頼を受けた同業者だ。
俺も手を振り返すとお互いに自分の仕事に戻った。

指定されたポイントをいくつか移動して
観測して情報を集めると、
端末にその情報を打ち込み、総督府に送る。
画面に映し出された心のこもっていない
『お疲れ様です』の文字を
確認した俺はバギーに向かって歩き始めた。
砂嵐はもう直ぐそこまできていたため、

少し駆け足気味で向かう俺の背中を
爆風が吹き飛ばした。
軽く３ｍは飛ばされた俺は峡谷の方を
振り返ると、
さっきの同業者が峡谷の淵で
アサルトライフルを乱射しながら
側に倒れたバイクに向かっている。
その傭兵がバイクを起こした時、
黒い波が峡谷から溢れ出た。
俺は背筋が凍りつくのを感じる。

「まずい、あの野郎巣を爆破しやがったな！」
俺はバックパックを捨てると
急いでバギーまで走り、
バギーの後部座席に積まれたＭ２重機関銃の
コッキングレバーを引き、
初弾を装填すると黒い波目がけて掃射を始めた。

１２．７×９９ｍｍＮＡＴＯ弾が降り注ぎ、
黒い波を構成する巨大なアリたちを
粉々に砕いていく。
バイクに乗った傭兵が俺の隣を通り抜けた
と同時に俺は射撃を辞め、
運転席に飛び込むとエンジンをかけ、
アクセルを目一杯踏み込んだ。
赤茶色の砂煙を巻き上げて走り始めたＬＳＶの
運転席で俺は無線機を取ると
アーガスの無線機の周波数に合わせて
話し始めた。
「アーガス！俺だ、聞こえるか!?」
『んん・・・・ どうしたタカシ？』
「アリだ！アリの群がエリア０１に向かってくる！」
『はは・・・ お前が冗談言うなんて知らなかったよ。』
「おい、真面目に聞け！
アリは速度遅いからそっちに行くまで

3時間はかかる。
お前が総督府に連絡して
防衛態勢を整えさせろ。わかったか？」
『あ、ああ・・・　わかった。』

俺は後ろを振り返ると
アリの群との距離は離れているが数は増え、
地平線を埋め尽くしているほどだった。
「クッソ・・・　父さんもこんな感じだったのか。」

3「Ｐｅｓｔ　Ｃｏｎｔｒｏｌ」

アーガスに総督府への警告を頼んだ直後、
俺の乗ったＬＳＶは砂嵐に包まれ、
無線が通じなくなった。
俺は一旦速度を落とすと、
帽子の上から頭に取り付けていた
マルチサイトと呼ばれるゴーグルを下ろす。
電源が入ると即座に
砂嵐の中に居ることを認識し、
視界が緑色に変わった。
マルチサイトをつけても砂嵐のせいで
視界はせいぜい数十ｍだが、
無いよりはマシだろう。

砂嵐が通り過ぎ、ゴーグルをあげると、

遠くにエリア０１の防壁が見えてくる。
俺は再びマルチサイトの電源を入れ、
０１の防衛部隊の状況を確認する。
名前はわからないが、
自走砲や戦車がたくさん並んでおり、
周囲では火星の風土に合わせたピンク色の
戦闘服に身を包んだ兵士達が
走り回っている。
俺は再び速度を上げ、
エリア０１への帰りを急いだ。

防衛陣地にたどり着いた俺は
鳴り響く砲撃音の中、

指揮所になっている建物に
ＬＳＶを乗り付けると指揮所に入った。
周囲からは軽蔑の視線を浴びるが、
俺は気にせず指揮官の元に向かった。
「金本、状況は？」
「・・・　傭兵が何様のつもりだ。
ここは防衛軍の陣地だ。部外者は帰れ。」
防衛軍士官学校の同期で、
今は左腕に大佐の階級章をとめている
この友人は・・・
まあ一般でいう友人の定義には程遠いが、
防衛軍の依頼を受けていた傭兵が
俺だと知ると、顔をしかめる。
「そうも言ってられないぞ。
今回はアリの数が多い。
他のエリアに増援要請はしたのか？」
「必要ない。」

「てことはしてないんだな？」
「……。」
黙った金本に俺はこぼれそうになったため息を
呑み込むと、話を続けた。
「なら集められるだけ
傭兵を集めて防衛線を張れ。
防衛軍に民間人をシェルターに誘導させろ。」
「なぜだ…」
「どうした？」
「それだけ優秀なお前が
なぜ防衛軍を辞めて傭兵なんかしてるんだ…？」
俺は投げかけられた質問を無視すると、
さらに話を続ける。
「俺は〝部外者〟だから
お前が指示を出せ。」
言いたいことだけ伝えると
俺は自分のＬＳＶに戻って車体を

アリの群れの方に向けると、
新しい弾薬箱を取り出してＭ２に装填した。

自走砲や戦車から撃ち出される
焼夷弾の炎が真っ赤な火星の大気を
ひときわ赤く染め、
焼夷弾の直撃で粉々になったり、
飛び散った炎に包まれて
焼かれるアリたちの悲鳴が耳にこびりつく。
俺は群れから突出しているアリに
１２．７×９９ｍｍＮＡＴＯ弾を叩き込む。
金本が俺の指示をそのまま伝えてくれたのか、
我先にと集まってきた傭兵たちも
ＴＯＷミサイルや迫撃砲で攻撃を始め、

砂漠に巨大アリの死体を増産していく。

砂漠に動くアリの影が無くなり、
もう何度目かも忘れたＭ２の銃身交換を
終えた頃に、
ようやく戦闘終了のサイレンが
エリア０１中心部から聞こえてきた。
俺は念のためＭ２に新しい弾薬箱を
装填して再び指揮所に向かった。

指揮所に入ると、
最初同様俺はまっすぐ金本の元に向かった。
「今度はなんだ？
文句か？報酬の話か？」
「いや、礼を言いに来た。

俺の指示をそのまま伝えたんだろ？
ありがとな。」
相変わらず愛想のない言葉を
並べる同期に礼を告げる。
「上には貴様のお父上の名前を
使わせて貰った。」
「ああ、なるほどな。
それと臨時で雇った傭兵たちの報酬だが、
俺のとこに領収書送ってくれ。」
「誰がそんなことするか！
私の命令で雇ったんだ。
傭兵に肩代わりさせるなど
できるわけないだろう！」
「お前のそういうプライドが高いとこ、
可愛いな。昔っからだ。
でも傭兵の稼ぎをなめて貰っちゃ困る。
お前の年収を1ヶ月で稼いでるんだ。

俺が払う、良いな?」
「くっ…好きにしろッ!」
俺は真っ赤になった顔を隠すように
俺に背を向けた金本の机に
積み重なった領収書の束を鷲掴みにして
指揮所を出ると、
ポケットから取り出した端末で
防衛戦に参加した傭兵部隊の代表へ
アーガスの酒場に集まるようメールを送ると、
自分の事務所兼自宅を目指して
バギーを走らせた。

4「疑惑」

俺は端末にクレジットをチャージし、
アーガスの酒場に向かった。
店の傍にバギーを停め店に入ろうとしたとき、
突然ボロボロのドアが大男とともに吹き飛び、
中から歓声が聞こえる。
「なっ…」
思わず驚きの声を漏らした俺は
赤茶色の砂が積もる道路に頭から突っ伏して
動かなくなった大男を覗き込む。
見覚えのある顔だ。
「…ベン？大丈夫か？」
今店の中から吹っ飛んで来た
このベンと言う大男は、
アメリカが作ったエリア０２からやって来た

傭兵部隊の長だ。
生きているのか怪しいベンの上を
乗り越えて俺は店に入る。
まず目に入ったのは
頭を抱えるアーガス。
そして男だらけの酒場とは思えないほどの
黄色い声援をあげる変態ども。
そして最後に俺を睨みつける
サングラスをした女の傭兵だ。
「アンタ、アイツの仲間？」
「いや、違う。」
「あっそう…。」
俺がいつも使っている席は
ベンを吹き飛ばしたと思われるおっかない女が
座ったため、少し離れた席に着く。
「アーガス、何があった？」
「店の修理代がバカなアメ公と

そこのおっかない女のせいで増えた。」
やっぱりか。
「聞こえてるわよ。」
「聞こえるように言ってんのさ。」
どんなにやばそうな客でも
恐れないこの親友は、
その女にも例外なく言い返す。
「とりあえず…悪いな。
こんなに野郎ばっか集めて。」
「おまけにただ1人の美人さんが
相当おっかないときた。
まあ、そう思ってくれてるうちはまだいいさ。
とりあえずこれ、返しとく。
異常はなかったぞ。」
俺は差し出された自宅の鍵と
警報装置の端末を受け取ると
総督府へ連絡してくれた礼を言い、

乾いた喉を潤そうとウィスキーを注文する。
何口か飲み、
俺は集まった傭兵たちに報酬を
支払う用意を整える。
「アーガス、ステージ借りるぞ。」
「ああ、いいよ。」

ステージと言っても
床から一段上がっただけだが、
少なくとも注目を集めるくらいはできる。
俺はステージに登って咳払いをすると、
サングラスをしたまま挨拶をした。
「エリア０１防衛戦に参加してくれた傭兵諸君、
今日はありがとう。
クライアントのタカシだ。
提出してあった請求書を元に

これから報酬の支払いを行う。
名前を呼ばれた順に来てくれ。
まずは…ヘルキャット傭兵事務所。
次に…」

未だに店の外に伸びているベンの
領収書を除いて全ての報酬を支払った
俺はベンの領収書をポケットに突っ込んで
視線をあげた。
するとさっきのおっかない女が
目の前に立っていた。
「うぉっ!?」
「失礼ね、人の顔見て驚くなんて。」
「ああ、すまん。どうした?
お前がボコった大男以外の支払いは
全部終わったぞ?」

「それとは違うわ。
アンタ、今日の観測任務を受けてたんでしょ？」
「ああ、それがどうした？」
「２人っきりで話したいの。
明日の０時半にこの住所まで来て。」
「は？」
何を言いだすかと思えば、
突然のお誘いである。
俺は困惑するが、それを察したのか、
女は真剣な表情で
俺の端末に位置情報を転送してくる。
「真面目な話。
今日の峡谷での爆発についてよ。
別に来なくてもいいけどそこは任せるわ。
それじゃあ、また今度。」
俺は峡谷の爆発と聞いた瞬間、
なんとなく身の危険を感じた。

誰かにスコープの中心に
捉えられているような感覚だ。
「待て。」
「何？」
「名前を聞いてない。」
金髪のポニーテールにサングラスのその女は
忘れてたという表情を浮かべる。
「私の名前はナタリー。苗字は無いわ。」
ナタリーはそのまま店を出て行った。
ナタリーが店を出たことで
空いた俺のいつもの席に付くと、
早速アーガスに質問される。
「あの女、なんて言ったんだ？」
俺は身の危険を感じていたため、
親友を巻き込まないように嘘を付く。
「デートのお誘いだ。
全く金持ちは辛いぜ。」

「そんなら店の修理代に
何ドルか落としてってくれよ。」
軽口を叩いてうまくごまかすと、
俺は店を出た。

5「濡れ衣」

アーガスの酒場を出た俺は、
ＬＳＶに飛び乗るとエンジンをかけ、
赤茶色の砂を巻き上げながら道路に飛び出した。
トラックや装甲車の間をぬって
自宅にたどり着くと、
ＬＳＶをガレージに入れて部屋に入る。
電気は付けずにマルチサイトを使って
部屋に入った俺は
書斎の本棚から何冊か本を引っ張り出すと、
本を開く。
くり抜かれた本の中から
１００マーズドルの束と
各エリアに入国できる偽造ＩＤを
取り出して新しいバックパックに詰め込む。

着替えやレーションは峡谷から逃げる時に
捨ててきてしまったので予備を引っ張り出した。
ウォークインクローゼットで
汗と砂にまみれたシャツやズボンを着替え、
今や時代遅れとなってしまった
タクティカルベストに身を包み、
ポーチに入るだけＡＫのマガジンを押し込む。
バックパックの空きスペースには
エリア０１での所持が禁止されている
手榴弾をねじ込むが、
見つかった時のことを考えて
バックパックから取り出し、
やはり置いていくことにした。
俺の嫌な予感が的中した時の備えを
済ますと俺は冷蔵庫から昨日の夕飯の
人工肉のステーキを取り出すと
窓際にもたれかかり、

端末でナタリーとの待ち合わせ場所までの
道を確認しながら食事する。
食事を終え、
４０年前に生産されたらしいＧ―ＳＨＯＣＫを見ると
デジタル画面は２２：００を指している。
３０分ほど仮眠を取るために
タイマーをセットしようと端末を取り出した時、
玄関のドアがノックされた。
「エリア０１防衛軍憲兵隊のものだ。
タカシ・シェオル、
貴様に総督府から出頭命令が出ている。
ここを開けろ。」
俺はデスクの上にある警報システムを
玄関の外のカメラに接続し、来客を確認した。
防衛軍特有のピンクの迷彩服に
ＭＰと書かれた腕章を付けた２人組だが、
手に持っているのは令状では無く

サプレッサー付きのＭＰＸだった。
「はっ、逮捕しに来たか?」
「抵抗すれば逮捕する。」
いかにも演技じみたやりとりをするのが
アホらしくなり、
俺は備え付けの電話を自分の端末にかけ、
スピーカーモードに切り替えると
ガレージへ向かう。
『早く開けろ。』
「こっちは便所の内線で話してんだ。
パトカーをクソまみれにしたくなかったら
あと５分待て。」
俺は書斎を出てリビングを通り抜けると
ガレージに入る前に
マルチサイトで中を確認した。
ガレージの中には反応が２つある。
俺がバックパックを下ろし、

腰のホルスターから
ＨＫ４５を取り出した時だった。
玄関のドアが突破され、
侵入者を告げる警報装置が正常に
作動を始めた。
間を空けずガレージに通じるドアからも
憲兵が突入してくるが、
俺は父さんに教わったジュウドウで
１人目を壁に叩きつけ、
後ろから来た２人目は咄嗟の思いつきで
ドアに挟んで無力化すると、
ガレージに入った。
ＬＳＶに飛び乗り、エンジンをかけると
道路を封鎖していた憲兵の制止を無視して
突破する。
道路を走る車の間を
ＬＳＶの機動力にものを言わせてすり抜け

憲兵隊との距離を離すが、
信じられないことに憲兵隊の軽装甲機動車は
邪魔になる車に追突して強行突破して来た。
俺は大通りで巻くことを諦め、
路地に入る。
軽装甲機動車では通れない道を何度も曲がり、
ナタリーとの待ち合わせ場所とは
全く違うナイトクラブの裏口に停めた。
荷物を下ろしていると、
用心棒らしきチンピラに声をかけられた。
「おいアンタ、ここは駐車禁止だ。
ボスの許可証とかコネがあるってんなら
別だけど・・・・」
「わるい、ちょっと急いでるんだ。
これはお前にやるよ。」
俺は用心棒の話を遮ると、
ＬＳＶの鍵を用心棒に投げて渡す。

用心棒は取り損ねそうになりながらも
なんとか受け取り、笑みを浮かべた。
「マジで？アンタメッチャいいヤツじゃん。」
「でもボスに叱られるんだろ？
早く別の場所に移した方がいい。」
「そ、そうだよな。
わかった、ありがとう！」
囮を確保することに成功した俺は
バックパックとＡＫを持ってさらに
路地の奥を目指した。

尾行が無いと確信した俺は再び大通りに戻り、

私営の乗合バスに飛び乗った。
まあ、大型の輸送トラックの荷台に
パイプ椅子を溶接しただけだが、
この際はどうでもいい。
ナタリーとの待ち合わせ場所の数ブロック前で
俺は他の乗客や乗務員に
口止め料をばら撒いて降りた。
再び腕時計を確認する。
約束の００：３０まで残り１時間。
俺は早めに待ち合わせ場所の
カフェがある宇宙港へ向かった。
宇宙港に入ると待ち合わせ場所のカフェが
よく見えるホテルに入った。
窓から双眼鏡でカフェの周囲に
憲兵が居ないかを数十分かけて探すが、
どうやら心配はなかったらしい。
制服、私服を問わず、憲兵らしい人物は

見当たらなかった。
続いてカフェに目を向けた時、
俺は驚いた。
なぜならすでにナタリーが居たからだ。
金髪のポニーテールに
サングラスという容姿は
そのまま服装だけが私服だ。
彼女は店の外の椅子に腰掛けて
今時珍しく新聞を読んでいる。
「なんて女だ・・・。堂々としすぎだろ。」
腕時計に目をやると、００：１５。
俺はホテルのロビーでドアマンに
バックパックとタクティカルベストを預けると、
ロビーから動かさないようチップをつけて頼み、
ホテルを後にした。

6「プロジェクト２０５６」

ホテルのロビーを出た俺は周囲に
憲兵が居ないことをさっと確認し、
途中の売店で売られていた雑誌を買うと
そのままカフェに向かう。
ナタリーの後ろにある椅子に座り、
お互いに背を向けあった状態で話を始めた。
「早かったわね。」
「人のことは言えないだろ。
それより目立ち過ぎだ、場所を変えよう。」
「アンタが見つけやすいように
目立ってたのよ。
奥のＶＩＰルームに来て。
店員に『２０３５』と言えば入れるわ。」
そう言い残すとナタリーは

気配を感じさせずにいつの間にか消えていた。

俺は指示通りに店の奥に行くと、
まるで執事のような服装の店員が立っていた。
その店員に例の数字を告げると店員は
無言で俺を通した。
奥の方に進み、俺が入った部屋は
あまり広くなかったが、
大人２人が話し合うには十分な広さだった。
俺はナタリーと向かい合って座ると、
サングラスを外した。
「それじゃあ聞かせてもらおうか。
今日、いや昨日の峡谷爆破の件から
俺が憲兵隊に消されかけてる理由までな。」
「そうね。
でも最初に私が

言わないといけない事があるわ。」
そういうとナタリーはサングラスをとり、
左目にかかった髪をかきあげた。
「なっ・・・・・・・」
「人の顔を見て驚くなんて失礼ね。」
いや、驚かない方がおかしいだろう。
出会うことはそうそう無いだろうと
思っていたオッドアイの火星人と
出会ったんだから。
驚きのあまり絶句する俺をよそに
ナタリーは話始める。
「その・・・・ 峡谷ではアンタのおかげで
助かったわ。
アンタがいなかったら私は今頃
アリの胃袋の中だった。」
「話が見えないんだが・・・・
峡谷でお前と会った覚えは無いぞ?」

「手を振ったら
振り返してくれたじゃない、忘れたの？」
俺の中で1つの謎が解けた。
俺はナタリーの胸ぐらを掴むと
壁に押し付けて怒鳴った。
「お前かッ!!
お前がアリの巣を吹っ飛ばしたんだろ！」
「私じゃ無いわよ！」
「じゃああそこで何をしてた!?」
「それを話すために読んだのよ。」
俺はゆっくりとナタリーを下ろすと
席に座った。
「まずは私の身分を教えるわ。
国連軍火星支部のナタリー曹長よ。
出身はイスラエル。」
「奇遇だな。
俺の母さんと同じだ。」

「いいえ、奇遇なんかじゃ無いわ。
私の母の名前はナオミ・ダヴィード。」
「なんだと・・・・」
俺は頭の中が真っ白になった。
ナオミ・ダヴィードは俺の母さんの名前だ。
「もうわかったでしょ、タカシ。」
「ね・・・・　姉さん？」
「そうなるわね。父親は違うけど・・・・」
「ありえねえッ！
いや、仮にそうだったとして
お前は地球産まれだろ？
それに峡谷の爆破にどう関係してくる!?」
「なぜかはわからないけど
火星支部で目覚めたらこうなってたわ。
身体能力も上がって外見も中身も
オッドアイになった。
私が峡谷に行った理由は２つあるの。

まず１つ目はエリア０１で計画されていた
プロジェクト２０５６の阻止。
２つ目はアンタを助けること。」
「２つ目はどうでもいい、
プロジェクト２０５６ってなんなんだ？」
ナタリーが一瞬悲しそうな表情を
浮かべたように見えたが、
今の俺にはそんなことを気にする余裕はない。
「普通の人間や火星人よりも
遥かに高い身体能力を
持つオッドアイを捕らえること。
それ以上は情報が無いわ。」
「だがオッドアイは数が少ないだろ？
俺が知ってるオッドアイは
今のとこ俺とお前だけだ。」
「日本の火星移住計画は知ってるわよね？
あの計画で最初に人類が

火星に降り立ったのは２０５２年。
そして目の赤い、いわゆる火星人が
産まれ始めたのが２０５３年よ。
そして２０５６年。
記録上初めてのオッドアイが確認されたわ。
しばらくして
オッドアイを持って産まれた子は
確実に高い身体能力を
持つ事がわかってきたの。
でもそれからはオッドアイの事例は
ぱったり消えた。」
「どういう事だ?」
「噂はたくさん。
エリア０１が隔離しているとか
オッドアイは一時的に発生した
病気だったとかね。」
もしどちらかの噂の通りだとしたら、

俺やナタリーがこうしていられる状況は
明らかに矛盾していた。
「でもそれだと俺がここにいるのは
おかしいだろ。」
「そうよ。
エリア０１は何か隠してる。
プロジェクト２０５６は
今に始まったことじゃない。」
俺はこれまでの話を思い返しながら
少し考えた。

「俺の仮説だが・・・・　いいか？」
「ええ、お願い。」

「プロジェクト２０５６は
　人体実験か何かだと思う。」
「根拠は？」
　ナタリーはまるで子どものように
　身を乗り出す。
「おそらく最初は被験体集めだろう。
　それで十分集まったから
　俺たちはモルモットになってないんだ。」
「それだとアンタを
　狙う理由にならないわよ？」
「最後まで聞けよ。
　多分集めた被験体に何かあったんだろう。
　峡谷の爆破はエリア０１が仕組んだ演技で、
　峡谷の任務の依頼が俺に来たのは
　俺を爆破犯の疑いをかけて
　ついでにお前を消すためだ。
　でもお前は生き延び、俺はアリを撃退。

第一段階が失敗したから今度は俺を狙って
家に来たわけだ。
俺が死んだとしても憲兵隊は俺を拘束して
自白させたとかなんとか言えば、
オッドアイをテロリストに
仕立て上げて堂々と被験体を集めれる。」
「筋は通ってるわね。
私はその線でもう少し調べてみる。
連絡先は渡すから
何かあったら連絡して。」
そう言うとナタリーはＶＩＰルームを
出て行き、
数十秒開けて俺も外に出た。

その直後、俺がさっきまで居たカフェが爆発し、
俺は地面に叩き付けられた。

店内から黒煙が溢れ出て、
うめき声や泣き叫ぶ女の声が
耳鳴りの合間に聞こえる。
クソッ・・・　俺を殺すのが狙いじゃないな・・・
俺は朦朧としながらもホテルに戻り、
ドアマンから荷物とライフルを
ひったくる。
俺はエリア０１を脱出すべく、
宇宙港の外へ走った。

7「大脱出」

逃げ惑う民間人や誘導する防衛軍の兵士を
掻き分けて行くと、
遠くに憲兵隊の制服が見えた。
武器は人混みに隠れて見えないが、
おそらく俺を狙っているのだろう。
人の波に逆らって
無人のコンビニに入った俺は、
他の出口を探す。
店の奥に通用口を見つけた俺は
そこを通って
地下にあるはずの搬入口を目指した。
通用口はコンクリート製の冷たい通路で、
木箱や強化樹脂製のコンテナが
人の往来を阻むようにところどころに

積み上げられている。
俺はその木箱やコンテナのせいで
狭くなった通路の壁やコンテナの突起に何度も
リュックサックを
引っ掛けては外しながら進んだ。

木箱やコンテナが置いてある場所を通り抜け、
やっと通路が建物の設計どおりの広さに
戻ったことで、俺が少し気を抜いた時だった。
目の前の搬入口に降りる階段から
ピンク色の迷彩服に身を包み、
左腕にＭＰと書かれた腕章を付けた憲兵が
出て来たのだ。
憲兵は俺を見るや銃を向けてくる。

もちろんオッドアイの俺には
スローモーションに見える。

俺は銃声を出したくないので
格闘戦にもちこもうとするが、
偶然とはいつも主人公の邪魔をするものだ。
バックパックが通り抜けたはずの
最後のコンテナに引っかかり、
盛大な音を立てて
積み上げられたコンテナを倒した。
引っかかったバックパックも
もれなく崩れ落ちたコンテナに引っ張られ、
俺は後ろ向きに倒れる。
どう考えても格闘戦は無理だと判断した俺は、
ＡＫ―７４を向けると安全装置を解除し、
セミオートで５．４５ｍｍ×３９弾を
憲兵の銃と肩に撃ち込み、
痛みのあまり仰け反る憲兵を
完全に無力化するために両足にも撃ち込んだ。
憲兵が倒れこみ、

スローモーションが終わるが、
現代の対人戦闘の基本は2人以上で1組だ。
この憲兵も例外は無く、
後ろから相棒が飛び出してくるが
俺の反応速度の方が早いらしく、
俺に照準が会う前に相棒同様
冷たい床で痛みに呻くことになった。
俺は引っかかったバックパックを
外すと立ち上がり、憲兵に近寄る。
「く、クソッ…バケモノめ…」
「人は自分が勝てない相手を過大評価する。
俺が強いんじゃない。お前らが弱いんだ。」
俺は2人組の憲兵から無線機と銃を奪い、
2人を気絶させると、搬入口には向かわず
関係者用の駐車場に向かった。

駐車場にたどり着いた俺は、
車に鍵をかけ忘れたアホが
いることを祈りながら、
手当たり次第に車のドアノブを
引っ張りまくる。

どうやら憲兵隊が定期的に
見回っているとはいえ、
地球とは比べ物にならないほど物騒な火星で
鍵をかけ忘れるバカはなかなか居らず、
俺の祈りは届かなかったのか
どの車にも鍵がかけられていた。
鍵かけないのは俺だけだったのか!?
クッソ…どうする…?
周囲を見回した俺の目に入ったのは

赤茶色の砂で汚れた真っ黒なボディーに
スモークガラスで、
ドアに５つの星と龍を
あしらったエンブレムのついたＳＵＶだった。

よりによってレッドスターズか…

中国が作ったエリア４から来た傭兵団、
レッドスターズは噂によれば全員が現役の
人民解放軍特殊部隊らしい。
チャイニーズマフィア顔負けの残虐さで
仕事をこなすため、
傭兵の間であまりいい印象はない。
なぜここにあるかは後で考えるとして、
とりあえずドアノブを引っ張ってみる。
ビイィィッ　ビイィィッ　ビイィィッ
「おわっ!?」

凄まじい音量でアラームがなり始め、
俺は驚いたが、
鍵がかかっていない車はこれしかないので
俺は運転席に潜り込んで配線を弄ると、
アラームを止めた。
さすがに有名な傭兵団なだけあって
盗まれるとは思ってなかったらしい。
鍵は挿しっぱなしだ。
鍵を回すとエンジンは何の問題も無くかかった。
俺はそのまま宇宙港の敷地を出て
適当な場所に停めると
レンタカーショップに入り、
バックパックから取り出した偽造ＩＤで
バギーを借りる。
バックパックを放り込んで
乗り込むとエンジンをかけ、
エリア０１の外へ向けて走らせた。

8「対空戦」

俺は偽造ＩＤでレンタカーを借りると、
馴染みの武器屋に入った。
「お、長らくだねー。
どうした？恋人の調子が悪いのか？」
「いや、ちょっと遠出するから
対物ライフルが欲しくてな。」
「やっぱ彼女の
５．４５×３９ｍｍじゃ徹甲弾でも
害虫は通さんだろ？」
「そんなことは無いが…」
「まあお前さんがこうして
顔出してくれてんならいいさ。
親父さんと一緒でしぶとそうだしな。」
「まあな。」

「車だろ？
ちっさめのヤツがいいよな。
この子なんてどうだ？ＧＭ６ｌｙｎｘ。」
「初めて見るな。
おやっさん、これなんかすごいのか？」
「へ～、お前さんでも知らねえ子が
いたんだなぁ。
しょうがねえ、紹介しよう。
この子はＧＭ６ｌｙｎｘ。
地球のハンガリーとか言う国で
作られた対物ライフルだ。
ゲパードＭ２の妹分だよ。
そして…能ある鷹は爪を隠すって
言うだろ？
この子はプルバップ方式ってだけで
コンパクトなのに銃身を収納できるんだ。
痺れるだろ？」

「っで、他は？」
「まあ急かすなって。
銃身を収納できるっつったがこの子は
ロングリコイル方式でな、
排莢する時に銃身ごと後退すんだ。
だから…こうやって…立ったままでも撃てる。
この子は１１ｋｇちょっとあって
ちょいとガッシリさんだから
俺にゃ厳しいが
お前さんなら楽勝だろ？」
おやっさんは立射の姿勢でＧＭ６１ｙｎｘを構えるが、
すでに手が震えている。
「いくらだ？」
「この子はかなりレアだからなぁ・・・
１００００マーズドルだな。
いや、やっぱ売らねえ。俺の嫁にするっ！」
「ああ…あぁ、えっと…」

まともに構えることすらできない銃を
嫁にするとか言うヤツ……　の前に、
銃を恋人として扱う男が
それを売り捌く職についていることは
どうかと思うが黙っておこう。
と言うか銃に嫁宣言した瞬間
キスし始めるのはやめて欲しい。
「と、とりあえず…Ｍ８２Ａ２あるか？」
「あ、あぁ…、あるぞ。
ちょっと待ってな。」
おやっさんが店の奥に消え、
いつ憲兵隊が来るかと不安になりながら
待つこと数分、
Ｍ８２Ａ２を持ったおやっさんが
目元に少し涙を浮かべてやってきた。
「悪い、タカシ。
この子キズものでな、

アリに噛み付かれた跡がある。
この子しか居ねえんだが、
５５００マーズドルにまけてやるから
もらってくんねえか？」
まるで娘を送り出す親の顔で
『キズもの』などと
娼館の主人のような矛盾した事を言う
この変態をいい加減どうにかしてやりたいが、
キズがあるのはハンドガードだけで
バレルや他の部分には
キズが無いから精度に問題は無いだろうし、
５５００マーズドルまでまけてくれることは
滅多に無いので買う。

「ありがとなぁ…
大事にしてやってくれよぉ…」

「ああ、わかってる。」
今にも泣き出しそうなおやっさんに
別れを告げると俺は店を後にし、
エリア０１の外へ通じるゲートに向かった。
ゲートにはもちろん検問所があり、
防衛軍が管理しているが、
そこの将校は検問所の所長という立場を利用して
傭兵たちがヤバイ物を持ち込むことを
黙認する代わりに大金を巻き上げていた。
俺はその手の運び屋はやっていなかったが、
これまで存在しないはずの通行料を
支払い続けていた。
憎たらしく思っていたが、
まさか俺がエリア０１を脱出する頼みの綱に
なるとは思いもしなかった。
俺はバックパックから１００マーズドルの束を
１つ取り出して準備すると、

検問所のゲート前で車を停めた。
着崩したピンクの迷彩服に
防衛軍が採用していないＸＭ８を
装備した不良軍人が俺の車に
近づいてくる。
俺は窓を少し下げる。
「ＩＤを見せて通行料として
５００マーズドル払いな。
ＩＤを見せたくねえなら追加料金もだ。」
俺は束から１０枚、
１０００マーズドル抜き取ると、
不良軍人に支払う。
「へっ、まいどありっ！」
「待て。」
俺はその不良軍人を呼び止め、
さらに５枚、５００マーズドル渡す。
「誰に何を聞かれても

ＩＤはちゃんと確認したと答えろ。
これは口止め料だ。」
「あいよ。俺はＩＤを見たが、
平凡すぎて顔も名前も忘れちまった。
これでいいな？」
「ああ、ありがとう。」
ゲートが上がり、
なんのトラブルも起こさずにエリア０１を
脱出した俺は、端末のマップを起動して
アメリカが管理するエリア０２を目指した。

周囲の景色が赤茶色の砂の海から
水が地面を削り取って作り出した
カラス峡谷にさしかかる。

エリア０１を背にして
バギーを走らせながら
俺は次の一手としてエリア０２の傭兵部隊、
ベンジャミン・ミリタリー・サービスに
電話をかける。
そう、自称俺の姉に吹っ飛ばされたやつが
社長をしている会社だ。

『はい、こちらは
ベンジャミン・ミリタリー・サービスです。
ご用件はなんでしょう?』
電話を取ったのは透き通った声の女で
火星では女の傭兵が珍しいせいか、
俺は軽く同様するが要件を伝える。
「あ、えっと…あぁ…
エリア０１のタカシ・シェオルだ。
ベンに話がある。

代わってもらえるか？」
『しばらくお待ちください。』
憲兵隊に追われ、
砂漠のど真ん中をバギーで
飛ばしまくってる俺に
落ち着けと言いたげに気の抜けた電子音が
数分流れ、突然威勢のいい男の声に変わる。
『よおタカシっ！元気だったか？』
「元気って…お前の方は大丈夫なのか？」
『いや～美人のねえちゃんの
ケツ触った代償が
まさかの回し蹴りとはなぁっ！
気づいたらアーガス以外誰も店にいなかった。
で、用事ってなんだ？』

要するにナタリーという国連軍の女のことだ。
しかし…なんだ？

この身内の不祥事を
咎められるような感覚は…？
「それでなんだが…
ちょっとヤバイことになってな。
０１から逃げてる。
そっちで入国の手配できないか？」
『なぁんだそんなことか？
任せとけ。』
「すまない。」
『なに謝ってんだよ、
この仕事ではよくあることじゃねえか。
それにお前には借りがある。
そんじゃあ待ってるぜ。』
「ありがとう。」
俺は電話を切ると、自由の国への希望を胸に
アクセルを踏む力を強めた。
だが今やテロリストの汚名を

着せられている傭兵が
簡単に逃げられるわけもなく、
白い尾を引く飛行物体が
バックミラーに映り込んだ。
そして次の瞬間、目の前の崖が爆発した。
「おわっ!?チキショーッ!」
落ちてくる岩を何とか躱し、
小石の雨の中をくぐり抜けると、
今度は前方の橋が吹き飛んだ。
幸い、川なんて人類が降り立つ前に
干上がっているため、
崩れた橋を坂道がわりに谷底に降りた。
「ヘルファイアか!?
初めて見たぞ、こん野郎…」
整備されてない谷底を
ガタゴトと走りながら
もう一度バックミラーを見る。

「嘘だろ…もう勘弁してくれッ！」
ＡＨ―６４Ｄアパッチロングボウが
２機も映り込んだ。
自衛隊でも２０３５年にやっと４０機揃えた
世界最強の戦闘ヘリだ。
いや、だったと言うべきか。
だがどちらにしろ、
そしていくら相手がオッドアイとはいえ、
ＡＫ―７４を持ったガキ１人相手に
持ち出す代物じゃないのは確かだ。
「クソ、ワザと外してるよな。
じゃあ車を停めるとどうなる？」
ブレーキを踏み込んで数秒たった。
今度は真後ろで爆発、いや大爆発が起き、
バギーの後ろが一瞬浮き上がった。
「ああそうか、
わかったよ上等じゃねえか！

ナメやがってこの腐れ軍人共が。」
俺は土煙の中、Ｍ８２Ａ２とＡＫ―７４、
荷物を持ってバギーを降り、
前の方に回り込んでエンジンを盾にする。
空飛ぶ戦車の前には何も無いに等しいが
気持ち的なものだ。無いよりマシだ。

終わっただろこの状況…。
詰んでんだろこの状況…。
チェックメイトだろ、王手だろ。
そのまま進んで強行突破でもした方が
良かったろ…。
早速車を降りたことを後悔し始めるが、
もうどうしようもない。
ＡＫ―７４のコッキングレバーを引くと
セレクターをフルオートに切り替え、

ＡＣＯＧサイトを覗いて
アパッチのコックピットを捉えた。
タタタンッ　タタタンッ
こ気味いい銃声がリズミカルに響き、
何度か連射すると
命中弾があったのか、
アパッチの姿は一旦峡谷の陰に隠れた。
俺は素早くＭ８２Ａ２を準備し、
脇のそばにある挿入口に
弁当箱サイズのマガジンを差し込み、
コッキングレバーを引く。
安全装置を外し、スコープのキャップを外した。
「まだ撃ったことは無いが…
そのためのセミオートだ。頼んだぜ。」
俺は遠くの岩に試し撃ちすると、
大雑把にスコープの零点調整を終わらせる。
「さあ来いッ！」

準備を整え、再びアパッチが来るのを待つ。
普通ならこの間に逃げ隠れするのだが、
これ以上邪魔されるのは癪だ。
峡谷を抜ける風が水の代わりに
川底に居座る砂を巻き上げる。
頬に当たる砂がチクチクと俺の神経を刺激し、
集中を切らそうとしているようだったが、
待ちに待ったその時がきた。
スコープに映ったアパッチのうち1機は
センサーに弾痕がある。
俺は自分の運の良さを鼻で笑うと
スコープをコックピットに向けた。
息を吸っては吐いてを繰り返し、
タイミングをはかる。
そしてアパッチがホバリングした直後、
M82A2が火を吹いた。
次の瞬間スコープの中のコックピットに

蜘蛛の巣のような白い弾痕が生まれ、
赤い血飛沫で真っ赤に染まる。
「よっしゃあッ！
ザマあみやがれ！」
コックピットをぶち抜かれたアパッチの
機種が大きく下がり、
地面めがけて加速する。
峡谷の陰に隠れて見えなくなった直後、
爆発音が轟いた。
俺は即座にもう一機のアパッチのコックピットに
照準を合わせるが、
それより先にアパッチのチェーンガンが火を噴く。
バギーを潰されるわけにはいかないので、
俺はＭ８２Ａ２だけを持って岩場に逃げ込んだ。
俺の周囲で水飛沫ならぬ砂飛沫をあげながら
３０×１１３ｍｍの弾丸の雨が降り注ぐが、
爆発はしない。

やはり俺を追い立てるためなのか、
榴弾ではなく演習弾のようだ。
まあどちらにしろ当たったら遺体は
残らないだろうから
当たらないに越したことはない。
無事岩場にたどり着くと、
アパッチがすり鉢飛行で回り込んで来る。
俺はＭ８２Ａ２で照準をあまり合わせずに
牽制射をするが、
装甲に弾かれて効果はなかった。
さらに移動してアパッチの死角に入ると
Ｍ８２Ａ２の薬室を覗く。残りは１発だ。
マガジンはもう１つあるが、バギーの中だ。
俺は岩にバイポッドを立てて
上がりきった息を整える。
峡谷の陰からアパッチが顔を出し、
スコープの中のチェーンガンが

こちらを向いた。
俺はコックピットを狙って引き金を絞る。
ズダンッという爆音とともに赤茶色の砂が
舞い上がり、
その奥でアパッチの兵装翼が火を吹いた。
「は?」
俺はもう一度スコープを覗き込んだ。
コックピットは無傷だが
左の兵装翼にぶら下がっている
ロケットポッドが爆発してメチャクチャに
なっていた。
「は・・・・外した。
クソッ、パイロットのニヤケ面に
１２．７ｍｍぶち込むはずだったのに・・・。」
だが兵装の半分が吹き飛んだアパッチは
チェーンガンをこちらに向けつつ向きを変え、
再び峡谷の陰に消えた。

追い払えたのでとりあえずよしとし、
俺はバギーに荷物とＡＫ―７４とＭ８２Ａ２を載せ、
Ｍ８２Ａ２のマガジンに１２．７×９９ｍｍＮＡＴＯ弾を
詰めなおしＭ８２Ａ２に装着すると、
運転席に移って再び車を走らせた。

9「ｄｅａｔｈ　ｒａｃｅ　」

俺はアパッチを追い払うと、
追い立てられていた道では無い方の道を
走っていた。
まあやつらのことだ。
この先に待ち伏せしてるか
後ろから追っかけて来てるか。
そしてその両方か。
まあ諦めてくれたなんてことはないだろう。
火星において貴重な航空機、
もっと言えば虎の子のアパッチロングボウを
一機ポシャってもう一機は大破させられたのだ。
向こうの指揮官はお顔真っ赤だろう。

相手の指揮官の顔を想像して

思わずにやけていた俺は、
サイドミラーにピンク色に塗装された車が
映り込んだのを見逃さなかった。
ハンヴィーにも見えるその車は、
日本の自衛隊が採用する高機動車だ。
屋根の幌は外され、
ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃が載っている。
５．５６×４５ｍｍＮＡＴＯ弾が
１分間に７２５発飛んでくることになると
知っている俺は、背筋に寒気を感じた。
俺の車は防弾加工されていない。
向こうが撃ち始めたらこの車と俺は蜂の巣だ。
高機動車の上でなにかが光って見えた瞬間、
俺はブレーキを踏んだ。
急激に減速した俺のバギーを
数発の５．５６×４５ｍｍＮＡＴＯ弾が貫き、
車内で跳弾する。

続けて後ろから突き飛ばされるような
感覚が俺を襲い、
俺のバギーはバランスを崩すが、
俺はすかさずハンドルを切った。
俺のバギーが高機動車と反対向きで
横付け状態になる。
助手席側の窓を通して見えた運転手の
驚いた顔に俺は
助手席に乗せていたＡＫ―７４の銃口を向ける。

だが俺のＡＫ―７４が火を吹くことは無かった。
やべ……セーフティー…
高機動車はそのまま通り過ぎ、
俺はそのまま取り残される。

「しくっタァぁぁ！
クッソ、ＨＫ４５使えば良かったッ!!」
俺はその場に停車したついでにＡＫ―７４の
セーフティーを解除してフルオートの位置で
止めると、
再び助手席に乗せて
車のアクセルを八つ当たりするように
思いっきり踏み込んだ。
バギーは尻を振るように１８０度回転すると、
俺に車体の腹を見せて
停車したままの高機動車めがけて
スピードを上げる。
ＭＩＮＩＭＩがこちらを向くが、
俺は体を助手席側に倒して隠れる。
バギーは止まることなく高機動車に衝突した。
エアバッグが膨らむが、
このバギーの設計者は俺のように

伏せて衝突させるドライバーがいることなど
考えるはずもない。
エアバッグの保護を受けられなかった俺は
思いっきり体を打ち付けた。
「ぐがっ…はぁ」
肺の空気を一気に吐き出した俺は
痛みに顔を歪めるが、
それを耐えてブレーキを踏む。
バギーは止まったが、
何かが崖を転がり落ちる音が
聞こえてくる。
よし…うまくいった…。
俺は体を起こし、
居るはずなのに居ないドライバーを
必死に守ろうとしているエアバッグを
ナイフで切り裂き、
さっきまで高機動車が映っていた

フロントガラスを覗き込む。
もちろんそこにはヒビが入っているだけで、
高機動車などいない。
俺はＡＫ―７４を片手にバギーを降りると、
崖の下を見下ろした。
高機動車は崖を１０ｍ近く転がり落ちて
止まっていた。
さすがはハンヴィーを基にしただけあって
車体はガラスを貼り替えれば
まだ使えそうだったが、
乗っていた防衛軍兵士たちにとっては
その頑丈なボディーが凶器となったようだ。
車外に投げ出された機銃手は
腕がありえない方向に曲がっており、
運転手は頭から血を流して動かない。
俺はバギーに戻ると
ヒビの入ったフロントガラスをぶち破り、

峡谷の出口へ急いだ。

１０「砂漠の海兵たち」

防衛軍の追撃を振り切り、
待ち伏せを避けるために
カラス峡谷の道無き道をバギーの踏破力に
ものをいわせて通り抜け、
やっとの思いでエリア０２にたどり着いた俺は、
エリア０２、正式名をアレス州という
この都市入り口で国境警備隊に
足止めをくらっていた。
まあ、弾痕だらけのバギーに
身体能力の高いオッドアイが
対物ライフル載っけて来たら
そりゃ警戒するだろう。
俺は隊員に許可を取ってベンに電話する。
「ベン、今ゲートについた。

そっちの入国手続きは？」
『終わってる。
今そっちに向かってるから
そうだな…あと５分待ってくれ。』
「わかった。
同じことをこの警備隊員にも頼む。」
俺はそう言うと警備隊員に電話を渡す。
しばらく話した後、
俺はゲートの脇に誘導されてそこで一息つく。
まだエリア０２に入っていないので
油断するのはどうかと思ったが、
さすがに０１の連中も第三次世界大戦を
戦い抜いた超大国アメリカ様の
目の前でドンパチやらかすほどバカでは
無いだろう。
しばらくすると
大量の砂埃を巻き上げてハンヴィーが

エリア０２の中からやってくる。
危うく国境警備隊のＳＵＶに
ぶつかる寸前で止まり、
俺はそのまぐれか実力かわからない運転技術に
感心していると、
運転席のドアが勢いよく開き、
せっかく無傷で済んだＳＵＶのボディーを
へこませた。
「あー、やっちゃった…。」
ライフルを構えながら
国境警備隊の隊員が集まり始めるが、
ハンヴィーの中から現れた白人の大男に
少し動揺している。
ハンヴィーから出て来たのは
やはりベンだった。
ベンは隊員に書類を突き出すと
隊員たちを押しのけて俺の方に歩いてくる。

「やっぱり峡谷で襲われたか。」
「ああ、なんとか通り抜けて来たよ。
それで俺は入国できるのか？」
「もちろんだ。
俺のコネで州知事のサインを貰ってきた。」

州知事に一体どんなコネ持ってんだよ…

ベンは踵を返すとハンヴィーに
向かって歩き始めた。
俺も荷物を持って付いて行き、
後部座席に乗せてもらう。
アレス州の街並みをB．M．S．
（ベンジャミン・ミリタリー・サービス）
の本部へと向かう。

「よーし着いたぞ。ここが俺の城だ。」

ベン曰く、城（自称）はまるで軍事施設を
連想させるような施設だった。
分厚いコンクリートブロックの壁で囲まれ、
あちこちに立つ監視塔にいる兵士は
ＳＣＡＲ―Ｈなどのバトルライフルに
スコープを載せて
施設の周囲に目を光らせている。
壁の所々に開けられた横長の穴は
トーチカとしての役割を果たしているようだ。
中に入るとそこには
二階建ての建物が４つあり、
どの屋上にも土嚢が積まれている。
おそらくその奥に重機関銃や迫撃砲が
あるのだろう。
キョロキョロと窓の外を見回していると
ハンヴィーが止まり、ベンが降りた。
俺も後に続いてハンヴィーから降りると

建物の入り口の前でベンが手招きしている。
そのまま建物の中まで入って
俺は一旦荷物をおろした。
部屋の奥にはデスクが並んでいて、
その近くの壁にはスクリーンがある。
二階は吹き抜けになっており、
さながら司令室だ。
「ようこそ、
ベンジャミン・ミリタリー・サービスへ。
俺は代表のベンジャミン・ボウデンだ。」
「知ってるよ。
スケベのベンだろ？」
「う、うるせえ！
あいさつだよ、あ・い・さ・つ！」
「はいはい。
でも…なんだかんだ言って
助けてくれてありがとな。」

「その件なんだが…」
急にソワソワし始めたベンに俺は警戒し、
腰のホルスターに手を伸ばす。
「こんなもんが届いてな…。」
ベンはタブレット端末の画面を操作すると
俺の方に向けてくる。
そこに映し出されていたのは
手配書だった。
名前はもちろんタカシ・シェオル。
俺のことだ。
親切なことに士官学校時代の
顔写真まで載ってる。
「タカシ、お前の返事次第で
どうするか決める。」
俺はＨＫ４５を抜くとベンに向けたが、
それと同時にデスクや壁の影から
７～８人の兵士が現れ、

俺に各々のライフルを向けてくる。
「チッ…騙したな？」
「お前の返事次第だ。
うちに入社しないか？
そうすればいくら０１のジャップが
本国経由で手配書送ってきても
追っ払える。
頼む、お前のためだ。」

どうすりゃいい!?
クソッ、信用していいのか？

俺はしばらく考えるが、
この状況を切り抜ける方法は
思いつかなかった。
肩にかけていたＡＫ―７４を床に置き、
ＨＫ４５の安全装置をかけると

ホルスターに戻した。
すると周囲の兵士たちも銃をおろし、
安堵の表情を浮かべている。
「わかった…。
だがやり方に口挟むなよ?」
「もちろんだとも。」

黒き正義
１１「バディ」

エリア０１の騒動から無事に脱出して
アメリカ領アレス州に転がり込んだ俺は、
１年前からアレス州でＰＭＣを経営している
友人のベンからいいように説得されて
今やベンジャミン・ミリタリー・サービスの
社員となっていた。
俺のやり方に口を出さないことを
条件に入社したこともあってか、
常に１人で動き、
軍隊特有のチームプレイの『チ』すら
頭に無い俺に、
周囲のオペレーターは
白い目を向けるが、

別に一緒に仕事をするわけでもないので
気にはしなかった。

――――――――――――――――――――――
B・M・S・本部　射撃場
――――――――――――――――――――――

「はぁ?
そんなバカな。」
「いや、本気だぜ。
ミスターシェオル。」
俺は目の前の
同い年か一個下くらいの年頃の
エリック・ボウマンと名乗った青年から
聞いた話に耳を疑った。
何でも、今日から俺の部下になるらしい。
「いや、絶対に有り得ない。
それとミスターなんて付けるな。

俺はよそ者だ、普通にタカシだとか
シェオルでいい。」
「そんじゃあ、タカ。
そう言うわけなんで
今日からよろしく。」
「だから有り得ないって言ってんだろ。
俺は１人が良いんだ。
忠誠心や仲間意識だとか言う海兵隊の
熱いノリはお断りだ。」
俺は自分のＡＫ７４に新しいマガジンを
装填しながら答える。
「ここは傭兵会社だぜ？
海兵隊じゃねえ。」
「そんなのはどうでも良い。
とにかく、俺は相棒なんてお断りだ。
俺にお前みたいなルーキーの
面倒を見る余裕は無い。」

俺はＡＫ７４のコッキングレバーを引き、
的に向ける。
「エリック・ボウマン海兵隊二等軍曹。
スカウトスナイパーとして
朝鮮半島に２度の出征。
公式射殺記録は５４人、
非公式だと６１人。
あんたがどれだけの死線を
潜ってきたか知らねえが、
ルーキー呼ばわりは失礼だぜ。」
俺はトリガーにかけた指を離すと、
セレクターレバーを
セーフティーの位置に上げ、
ため息を吐き、後頭部を掻く。
「…ついて来い。」

俺はエリックを連れて
射撃場の外に出ると、
壁に背を預けて話を続ける。
「市街地戦の経験は？」
「２度とも任務は平壌での
歩兵部隊支援だ。
もともと市街地戦しかやってねえよ。」

なるほど。
かなり優秀だが、大戦後の軍縮の影響で
軍を追われたんだろう。

俺はもう一度後頭部を掻きながら、
入社した時に貰った端末を呼び出す。

いくつか並んでいる”仕事”のファイルから
１つ選ぶと、
いつの間にか追加されていた
『Ｔｅａｍ』をタップして
Ｅｒｉｋ　Ｂｏｗｍａｎを選び、
そのファイルを転送した。
「監視任務…か。」
「あぁ、お手の物だろ？」
「はっ、オ○○ーの方が簡単だ。」
エリックは鼻で笑ってそう言い返してくる。
「その軽口がどこまで本気か…
お手並み拝見といこう。」
俺は端末を
ポケットにしまいながら宿舎に向かうために
射撃場の外に出た。
宿舎の自室でプレートキャリアと
ガンベルトを身に付け、

ヘルメットとマルチサイト、
軽食、クラップリングフック、
その他諸々の装備品を放り込んだ。
部屋を出ると、
すでにエリックが外で待っていた。
「…早いな。」
「金が無くてね。身軽なだけだ。」
エリックの装備を見ると、
確かに身軽だ。
上から順にブーニーハット、
サングラス、アフガンストール、
ポロシャツ、チェストリグ、
ガンベルト、タクティカルパンツ、
トレッキングブーツだ。
得物はというと、
ＳＲ―４７を５．４５×３９ｍｍ仕様に
カスタムした物と、

ガンケースに入った謎の一丁、
Ｍ４５のカスタム品。
まぁなぜ金が足りなくなったかは
想像がつく。
そのまま行くのも良いが
人生初の相棒に初日で
逝かれてはたまったもんじゃない。
「ちょっと待ってろ。」
俺は部屋に引き返して
非常用の装備バッグから
ケブラーの防弾ベストを取り出すと、
エリックに投げ渡す。
「着とけ。」
「ふうん…意外と優しいんだな。」
「勘違いすんな。
初日で相棒に死なれたら
寝付きが悪いからだ。」

「そういうのを
ツンデレって言うんだぜ。」
「うるさい。ほら行くぞ。」

12「殺しと金と正義と」

俺は助手席に相棒ことエリック、
後部座席に監視任務に必要な装備が詰まった
ボストンバックを載せて、
アレス州を囲う防壁に沿って
構築されているスラム街へ向かっていた。
「タカ、ロシアンマフィア相手だろ？
あと2、3チーム連れて
突っ込みゃ楽勝じゃねえのか？」
「理由はいくつかあるが、
1つ目は俺が少人数で静かにやりたいから。
2つ目はちょっとした軍隊並みの武器を
持ってるロシア人と正面からやりあったら
こっちにも損害が出る。」
「そんなのは付き物だろ？」

「わかってないな。
　これは戦争じゃない、ビジネスだ。
　必要最低限のコストで
　最大限の利益を挙げないといけないんだ。」
　エリックは納得できないというように
　うーんと軽く唸って
　窓の外に視線を戻す。
　どうやら正義感や倫理感は
　捨て切ってないらしい。
「それで、今回の仕事でいう利益ってのは？」
「アレス州から出る報酬、
　ロシア人が密輸した武器とクスリ、
　この地域での支配力拡大ってとこだろな。」
「……。」
「考えるのはいいことだ。
　Ｂ．Ｍ．Ｓ．はいい会社だが、
　やってることは白と黒のちょうど中間。

マフィアと違うのは
法を守る側についたことくらいだ。
組織に呑まれないようにしろ。」
「ああ…タカの気持ちがわかった気がする。」

いや…それだけじゃ無い…。
俺が1人を好む理由は
誰かに理解できるもんじゃない。
お前なんかに理解されてたまるか。

俺はエリックの
同情ともとれる呟きを無視して
車を路肩に停めた。
「交戦規定は？」
「命令あるまで待機。」
「了解。」
スラム街といっても

トタン屋根が並ぶほど荒れてはいないが、
アパートやマンションは
廊下にまで人が溢れ、
隣り合う建物の屋上はいつの間にか
橋が架けられていたりする。
高架橋には毎朝のように死体が
吊るされていたり、
路地や酒場の隅っこで密売人が
取引をしていたり、
自動車の修理工場で車に密輸品や奴隷を
隠していたりと、
挙げたらキリがない。
俺が車を停めた地域は、
最近Ｂ．Ｍ．Ｓ．とＦＢＩの合同部隊が
マフィアのアジトを潰したおかげで
治安が安定し始めた。

「うわっ!?ｆ○ｃｋ！」
車を降りた直後に何か踏んだらしい。
エリックが放送禁止用語を連発し始めた。
「どうした？」
「わざとここに停めただろ！
目玉と舌を踏んじまった！」
車の反対側に回ると、
エリックに踏まれて潰れた目玉と
切り落とされた舌、耳、鼻、唇が
散らかっていて、
血でロシア語の警告文が書いてある。
一応さっきの説明は訂正しておこう。
治安は以前よりマシになった。
「すまん、隣の車の影で
気づかなかった。」
俺は端末を取り出して写真を撮ると、

位置情報を添付して本部に送信する。
「警察ごっこかよ!?
少しは俺の心配してくれよ!」
「お前は死んでないし全部付いてるし、
それに○○○も付いてる。
でもこいつのはここに転がってる。」
俺が車の下に転がっていた
一物を指さすと、
エリックは今度こそ我慢の限界が
来たらしく、
口元を手で抑えて
何処かへ行ってしまった。
俺は本部に電話で
報告と片付けを頼むと、
後部座席から
装備の詰まったボストンバッグを
取り出してエリックの後を追った。

路地に入ると、
案の定エリックが地面に
昼食をぶちまけた後だった。
「はぁっ…はぁっ…クソっ…
なんか…あれはエイリアンが
殺ったんじゃねえのか？」
「いや、たぶんロシアンマフィアだ。
本部のやつによると

Ｂ．Ｍ．Ｓ．の隊員がこの前の掃討戦で
捕虜になったらしい。」
「んで…あの…顔のパーツは
その捕虜？」
「…かもな。
ついでにそれも調べるか。
ほら行くぞ。」
夕日すら差し込まないくらい路地を
俺とエリックは急ぎ足で通り抜ける。
ゴミ箱やちょっとしたくぼみに
麻薬中毒者や死体が転がっていて、
以前来た時同様に
虚ろな視線を向けてくるが、
特に救いを求めるでもなく
ただ見つめてくる。
端末のマップにも載っていないような
角を何度も曲がってたどり着いた

アパートの一室に入ると、
クリアリングと盗聴器の有無を調べて
機材を広げる。
「タカ、ここは一体なんなんだ？」
「俺の隠れ家の一つだ。
誰にも言うなよ？」
「……。」
「冗談だ。
協力者に手配してもらった監視拠点だ。
見ろ、向かいに見える整備工場が
監視対象だ。」
カーテンをめくって外の様子を伺った
エリックの肩口から俺も外の様子を伺う。
道路を挟んだ向かい側には
自動車整備工場があり、
ゲート前のＡＫとボディーアーマーに
身を固めた男たちが目を光らせている。

奥の方に視線を移すと、
工場の入り口からは溶接用のバーナーが
発する火花が時折姿を見せる。
「整備工場にこんな警備が必要か？」
「この地域ではこれでも足りない。」
「観た感じ普通だぜ。」
「観た感じはな。
依頼者の見立てでは
武器の密輸拠点らしい。
俺たちはここに出入りする人物の
情報を集める。
あとは任せていいか？」
「ああ、任せとけ。」
「２時間交代で頼む。」
俺はエリックにそう告げて
ボロボロのソファーに身を預け、
少しの休憩を取った。

13「偽られた罪」

『タカシ…お前は…』
1人の女がそう呟いて
俺から少しずつ離れて行く。
俺の手には士官学校生徒に所持が
義務付けられている9mm拳銃が
握られていた。
目の前には俺と同じ制服を着た男が
胸から血を流して倒れている。
『はぁっ…はぁっ…』
息が上がり、呼吸が乱れ、
俺の手から拳銃が滑り落ちた。
俺はまるで血を抜かれたような
脱力感とともに
その場に膝から崩れ落ちる。

『だ、大丈夫だタカシ…
向こうが先に…』
『…来るな。』
『だ、だが…』
『離せッ！』
近づいて
俺の手を優しく握りこむ女を
俺は突き飛ばし、
落とした拳銃を拾い上げて
その女に向けた。
『俺に近づくな！』

―――――――――――――――――――――――――――――

「お、おいバカッ！
何すんだよ!?」
目を覚ました俺は、

いつの間にか相棒のエリックに
銃を向けている事に気がついた。
「悪い…何分経った？」
「…４０分ってとこだ。
うなされてたから起こした。」
「すまん…。」
「悪夢か？」
俺はエリックに
手渡されたペットボトルを受け取ると、
そのまま一気に半分を飲む。
「そんな感じだ…。」
「少し…話してみろよ。
楽になると思うぜ。」
俺はペットボトルの水を
全て飲み干すと
もう一度夢の内容を思い返す。

夢を見ていた。
あれは…士官学校３年生の頃の…
俺はオッドアイというだけで
入学当時から軽蔑されていたが、
１人だけ…１人だけ
寮の部屋が隣り合っている関係で
仲良くなった金本遥という子がいた。
金本の父親は自衛隊の元幹部で、
日本から防衛軍の軍事顧問として呼ばれ、
どういうわけか家族全員で
火星に移住したらしい。
火星での生活は

”純日本人”という理由もあって
何不自由なかったらしく、
エリア０１の生活水準だけでなく
当時の日本の生活水準的に見ても
かなり裕福だったとか。
見た目は本人曰く母親に似ていて、
凛とした顔立ちに
短めのポニーテールがよく似合ってた。

「タカシ、すまないが
ここのページについて教えてくれ。」
そして夢の中での俺は、
分類は高等学校だが
教室での席は自由となっている

防衛軍士官学校の教室で、
ほぼ日課となりつつあった
授業要約のお願いを
金本からされるが、
「テキストを読めばいいだろ。」
今時誰も持たない紙の本を
パタンと閉じて本心ではないが、
軽くあしらおうとしてしまっていた。
「次の授業まで時間が無いのだ。
頼む、この通りだ！」
口調に反してこういう時だけ
女らしさを出しながら、
上目遣いで頼まれた俺は
やはり耐えることはできずに
結局言う事を聞く。
「あーわかったわかった。
はぁ……見せろ。」

俺は金本の端末をひったくると、
指さされた部分を見る。
「ああ、ここか…。
確かに面倒だなぁ。
俺の端末からデータ送るから
それを見ればわかるはず。」
端末を操作し始めた俺の背後で
金本がソワソワしているが、
俺は早く本を読み進めたい一心で
端末の操作に集中する。
「…タカシ、
その…このあと食事でもどうだ?」
「は?」
誤解を受けないように俺の様子を
一言で表すと、
『豆鉄砲を喰らった鳩の顔』だ。
だが金本の方は誤解したらしい。

慌てて両手を体の前で小さく振る。
「いや、忘れてくれ。」
「すまん…そういうわけじゃ…」
誤解を解こうと
口を開いた俺の言葉を
嫌味のこもった男の声が遮る。
「遥ぁ、そんなヤツより
僕と来なよ。」
「…河村、貴殿の誘いは
お断りしたはずだが。」
「お断りも何も親同士で
話がついちゃってるからさぁ。」
「おい、何言ってんだ。」
俺は金本をその乱入者の視線から
隠すように席を立つが、
状況は悪い方向へ転がる。
「おやぁ？

僕に歯向かうのかい？」
俺は威嚇の意味を込めて
ソイツのほうに一歩踏み出すが、
特に怯んだ様子も無い。
むしろやる気らしい。
「おぉ!?やる気かぁ？
オッドアイのくせにカッコつけるねぇ～。」
相手は同じクラスの純日本人だ。
所詮は親の七光りってヤツだ。
俺は金本の端末を机に置き、
目の前の生意気な
おぼっちゃまに赤っ恥をかかせようと
自分の端末を取り出した。
「口は達者だが…
成績の方はどうだろな？」
端末を操作してクラス名簿にアクセスする。
そのまま教官用の端末を

ハッキングして目の前の
河村というおぼっちゃまの
ファイルを発見した。
「読み上げてみるか。
国語総合Ｃ＋、数学Ｂ―、英語Ｃ―…」
「き、貴様ぁ！
ボクの成績データをどうやって!?」
俺は後退りをする河村に
追い討ちをかける。
「まだ続けるか？
科学は…おっと…こりゃまずいぞ。
Ｄ＋か。卒業できるか不安だな。
ママに聞かれたら大変だろ？
オッドアイに構ってる時間も
惜しいはずだが大丈夫なのか？」
「…チッ、調子にのるなよ…。」
河村は覚えてろよと

いかにも悪党めいた捨て台詞を残して
教室を出て行ったが、
俺と金本には周囲のクラスメイトから
異物を見るような視線を向けられる。
「す、すまない…タカシ…。」
「謝るな。
『士官たる前に紳士であれ』だろ？
それに俺はオッドアイだから
お前みたいに
自分の自由を殺される気持ちがわかる。」
「だが…しかし…」
俺は俯いてブツブツと
呟いている金本の手を引いて
教室の外へ連れ出す。
「な、何を!?どこへ行くのだ!?」
「ここは居心地が悪くなった。」
「だが授業が…!」

「俺が教える。
少なくともあのハゲ教官よりは
わかりやすい。」
金本の家の事情も考慮して、
俺は普段から持ち歩いている
カラーコンタクトを付けると
そのまま学校を抜け出し、
エリア０１の街へ繰り出した。
「タカシ、いい加減どこへ行くのか
教えてくれ…。」
「おやっさんのとこ…ってわからないか…。
まあ、親父の知り合いの店だ。」
「さ、さっき授業を教えると
言ったではないか！」
「ああ、言ったとも。
今日の午後は実技で
９ｍｍ短機関銃の実射訓練だ。

おやっさんの射撃場でする。
喜べ、２時間ずっと撃ちまくれるぞ。」

おやっさんの店で
士官学校での実技で使う弾薬の
一ヶ月分以上を撃ちまくった俺と金本は、
店を出て寮に戻るために
人通りの少ない路地を通っていた。
憲兵隊に見つからないよう
人通りの少ない工場の裏手を
通っている時だった。
不意に聞き覚えのある男の声に
呼び止められた。

「タカシィッ！
やっと見つけたぁッ！」
振り返った先には
昼に追っ払った
おぼっちゃまこと河村の姿があった。
「今度はどうした？」
「さっきはよくもぉ…
よくも恥をかかせてくれたなぁッ！」

どうやら仕返しをしに来たようだが、
どう考えてもアイツ１人じゃ勝ち目は薄い。
…と言う事は…

「取り巻きがいるんだな？」
「ああそうだとも。
貴様らはここで路上強盗に襲われて
死ぬんだァ！」

河村がヒステリックな声で
そう叫んだのを合図に、
ナイフやバールを手にした男たち6人に
囲まれた。
俺は反射的に腰の9mm拳銃に手を伸ばが、
同じ士官学校の生徒である河村に
この動きは察知されてしまう。
「おおっとぉ…
それはやめろよぉ。
俺だって士官学校生相手に
棒きれだけで
向かわせるわけないだろォッ！」
横からポンプアクションショットガン特有の
ジャコッという音とともに
ショットガンを持った男が現れた。
横目でソイツを見ると、
一目で素人だということがわかる。

構えは銃の重さを支えきれないのか
やや後ろに反っているし、
脇は大きく開かれている。
これだと初弾を撃った反動で
体勢を崩すだろう。
だがショットガンの銃口が
俺と金本を捉えていることは変わらない。
俺は全員の急所以外を撃って
行動不能にさせる意思を、
後ろの金本に
手のひらを使ったモールス信号で
伝えると、
ホルスターに収まる９ｍｍ拳銃の感触を
もう一度確かめるように触れる。
「サァ、タカシィ…
大人しく死ねやァ！」

パパパァン、パパパァン…

金本が地面に伏せた直後、
路地に９ｍｍ口径弾の乾いた銃声が
響き渡り、
俺の９ｍｍ拳銃から
撃ち出された銃弾は
男たちの肩を正確に撃ち抜いた。
銃声に続いて男たちのうめき声が
取って代わる。
俺は河村に銃を向けたまま
ゆっくりと近づいていく。
「…ずさん過ぎるぞ。
こんな素人だけで敵うと思ったのか？」
「このォ…役立たずどもめェ…」
「河村博司、
犯罪教唆とその支援を行った容疑で

お前を憲兵隊に通報する。」

俺が憲兵隊を呼ぼうと
ポケットの端末に手を伸ばした時だった。
河村が制服の上着の間に
手を伸ばし、
何かを取り出そうとする。
上着から徐々に現れる”何か”は
黒光りする拳銃に見えた。
俺は反射的に…いや、
俺は迷わず引き金を引いた。

路地裏に乾いた銃声が再び響く。
河村の制服の胸に
赤いシミが出来上がり、
ジワジワとシミが広がっていく。
「く…かはぁ…!?
ぼ、僕を撃った…?」
「クソッ！
金本ッ！救急車呼べッ！」
「あ、ああ、わかった…」

仰向けに倒れて胸を抑える河村は、
応急処置を施す俺に
こう言い残した。

「ばけ…ものめ…！
だが…ゴホッ、ゴホッ…、
…僕の勝ちだ…！」

実際、そうだった。

救急隊が駆けつける前、
俺は河村の右腕が上着の中で
９ｍｍ拳銃をしっかりと握っているのを
この目で見たが、
士官学校生という身分上
軍事裁判で裁かれることになった俺に
防衛軍調査局が読み上げた報告書では、

『被害者の河村博司は
当時拳銃を携行していなかった。
目撃者の証言によると、
被告人のタカシ・シェオルは
両手を上げて
投降の意図を示していた
河村博司を射殺した。』
となっていた。
親父の雇ってくれた弁護士の
反論は聞き受け入れられることなく、
権力に負けた俺が
偽られた罪を受け入れることで
裁判は閉廷した。
親父の根回しのおかげで
刑や士官学校の退学は免れ、
その後は何事もなかったかのように
残りの学校生活を送った。

俺は卒業式は辞退し、
防衛軍入隊は諦めた。
金本は俺が抜けたぶん繰り上がって
首席で卒業を迎え、
今は親の名前に頼ることなく
出世街道まっしぐらだ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「いくら正当防衛でも
同期殺しの結果は変わらない。
あれ以来俺は１人で生きると
心に誓った。」
「そっか。
でもあんたのこと知れて嬉しいぜ。」
立ち上がってゴミ箱の近くまで
行ってペットボトルを
投げ入れた俺に、

エリックが驚いたとでも言うように尋ねる。
「ん？ちょっと待てよ…
俺はタカに信用されてるってことか？」
「聞かれたから答えただけだ。」
「出た、このツンデレ！」
嬉しそうに囃し立てるエリックの
一言にカチンときた俺は、
ここが壁の薄いアパートの一室
ということも忘れて怒鳴りつける。
「誰がツンデレだ誰がッ！
先輩にもっと気を使え、このアメ公！」

結局、お隣のロシア女が
端末でも翻訳不可能な早口言葉で
怒鳴り込んでくるまで口論は続き、
おまけにロシアンマフィアのアジトを

監視するために設置したカメラにも
口論の内容は
一語一句残さず録音されてしまった。

14「殺しと金と正義と」2

エリックとの口論がうるさ過ぎて
お隣さんに怒鳴られたあと、
俺はもう一度寝ると
悪夢を見そうな気がしたので
エリックと見張りを交代し、
持ち込んだレーション片手に
整備工場に出入りする者の写真を
撮っていた。

夕方になり、日が傾き始めた頃に、
白いバンが3台、列を成して整備工場に

入って行った。
俺はその３台のナンバープレートの
写真を撮り、
端末から本部に転送して
ナンバーの照会を頼むと、
バンが入って行ったガレージを眺める。
『どうも、タカシさん。』
「リンダか？
結果はどうだった？」
『今から送るので少し待ってください。』
イヤホンから聞こえた女声に質問すると、
最初同様、無機質な返事を返される。
送られて来た資料が示した持ち主は、
杉村という日本人だった。
「日本人か。」
『そのようです。
エリア０３のレッドスターズから

人身売買の容疑で懸賞金が
かけられています。』
「それで、どうする？」
『Ｂ．Ｍ．Ｓ．上層部の方針としては
ここでレッドスターズに恩を売り、
良好な関係を築いておきたいそうです。
証拠を押さえるので強襲部隊を送ります。
お二人は突入の支援をお願いします。』
「了解。
他に何かあるか？」
『…相棒とはどうですか？』
全く痛いところを突いてくる女だ。
俺はいびきも立てず
静かに寝ているエリックの方を
ちらっと見て答える。
「まだ組んで数日だ。
まだわからない。

それよりベンは一体
どういうつもりなんだ？」
『私にはわかりませんが
社長としては
タカシさんを心配しているのでは
ないでしょうか？』
「どうして？」
イラだったような声で
なげやりに答える俺にリンダは
やはり無機質な声で受け答える。
『組織が嫌いでも仲間くらいは
信用してほしいんでしょう。』
「また余計な世話を…」
『それだけ貴方への恩を
感じてるということです。』
「わかったわかった。
はぁ……まだあるか？」

『以上です。』
ブチッという音とともに
イヤホンからの音が消え、
エリックの寝息を残して部屋が
無音に包まれた。

「起こすか…」
俺はエリックが寝ているソファーの
脚を軽く蹴った。
エリックは一瞬ビクッと震え、
目を開ける。
「交代か?」
「いや、スナイパーの出番だ。」
「ふぅ…」
エリックはソファーの上で

体を起こし、
ため息をつくと辺りを見回す。
「場所を変えようぜ。
ここじゃ退路を確保できない。」
荷物を片付けながら
俺たちは狙撃ポイントについて
話し合い、
結果は屋上にすることになった。
俺がゴミを片付けて
証拠を消していると、
エリックが洗面所に行った。
「エリック、もう行くぞ。」
俺がエリックをそう急かすと、
すぐ行くという返事とともに
ガラスが割れる音がした。
「なにしてんだ!?」
せっかく俺が証拠を消してるのに

ガラスを割ったら意味がない。
俺は苛立って怒鳴りそうになるのを
堪えて洗面所に行くと、
エリックは割ったガラス片と
ダクトテープでモビールのようなものを
作っていた。
「囮だ。
部屋が整備工場の北にあっから
スコープにキルフラッシュは付けてるが
位置がバレるのは時間の問題だろ？
こいつを囮にして
この部屋におびき寄せる。
お隣さんには申し訳ないけど
奴らが部屋に入った瞬間吹っ飛ばす。」
俺は流石と言いたくなるのを堪えて
無言でバックパックを下ろすと、
中から自作のプラスチック爆弾を取り出した。

「３分クッキングか？」
「黙ってろ。」
茶化すエリックを黙らせ、
プラスチック爆弾を
キッチンから持ってきた鍋の中央に置き、
その周りにＡＫ７４の７．６２×３９ｍｍ弾を
マガジン一本ぶんテープで巻きつけた。
起爆装置の動作チェックを済ますと
最後に鍋の蓋をして
それもダクトテープでグルグル巻きにした。
「４分だったな。」
「うるさい。」

部屋を出てアパートの屋上の共有スペースに
陣取った俺たちは、
落下防止用のフェンスに切り目を入れて
狙撃に必要な穴を確保すると
植木鉢やらダンボールやらを
集めてフェンスに立てかけて目隠しにする。
隣にもダミーの目隠しを
いくつか作って一息つく。
「リンダ、こっちの準備は終わった。
いつでもいいぞ。」
『了解です。
強襲部隊は数分で到着します。
砂嵐が近いです。
こちらとの通信が数分間途絶します。』
俺は短く肯定の返事を返して
整備工場の観察を改めて始めるが、

見ればみるほど怪しいものだ。
州の中心部ならまだしも、
ここは州の外壁近く。
つまり仕事帰りの傭兵相手に
稼げる立地なのに、
並んでいる車両は
小綺麗な乗用車ばかりで、
見た目は民間相手の商売を
しているように見える。
そのくせ警備は一丁前で、
ここ数日の監視中は車が入るだけで
一台も出てきていない。
怪しいを通り越して
何かあると確信できるレベルだ。
そんな感想を抱いていると、
無線にノイズ混じりの野太い男声が
入ってくる。

『こちらアルファゼロ。
ブラボーワンだな？
背中は任せた。』
どうやらもう強襲部隊が着いたらしい。
俺は無線のスイッチを押して答える。
「こちらブラボーワン、了解。
そちらの現在位置を知らせてくれ。」
『暗視装置に切り替えろ。
ＩＲストロボでこちらの位置を知らせる。』
「了解。
エリック、暗視装置を使え。」
隣でＭｋ１１のスコープを
覗いていたエリックは、
そのビデオカメラようなスコープの
ボタンをいくつか押す。
おそらく火星では
かなり珍しいこのスコープのおかげで

財布がスッカラカンに
なったんだろうななどと考えていた俺に
エリックが短く返事を返す。
「いいぜ。
はっきり見える。」
俺もマルチサイトを起動して
暗視装置モードにすると、
整備工場の近くに止まっている
貨物トラックの荷台から
マズルフラッシュのような
光がチラチラと覗いている。
「アルファゼロ、
そちらの位置は整備工場正門から
３５ｍ離れたトラックで間違いないか？」
『そうだ。
これから接近する。
索敵を頼む。』

「了解。」
味方の位置を確認した俺は、
整備工場全体を見渡す。
「整備工場正門に2名。
武装はＡＫＭとＨＫ３２、
その奥のバスの陰に３名、雑談中だ。
武装は３名ともＵＺＩ。
正門の２名はこちらで排除する。
移動してくれ。」
『了解、確認した。
任せる。』
トラックから私服姿にボディアーマーを
身につけ、アサルトライフルで
武装した味方６人が出て来るのを
確認すると、
俺はエリックに撃てと指示する。
シュパァンという

サプレッサーに抑制された銃声が２度響き、
マルチサイトが映し出す２人の男が
膝から崩れ落ちた。
すかさずアルファゼロの隊員が
死体となった男を死角へと引きずりこむ。
「正門クリア。
奥の３人は気づいてない。」
『了解。
残りはこちらで処理する。』
まるでゴミを扱うような物言いに
俺は少し嫌悪感を覚えるが、
そんな思考は隅に追いやる。
俺が物思いにふけっていた一方、
強襲部隊の方は
スムーズな動作で
整備工場の敷地に侵入した。
無造作に並んだ車に沿って

６人全員が周囲を警戒しながら
水が流れるように談笑中の３人に近づくが、
立ち止まる気配は無い。
「おい、あれってまずくねえか？」
「…フォローの準備を。」
エリックも俺と同じく不安に感じているらしく、
肩に力が入っているのが見て取れる。
だが俺とエリックの心配は必要なかった。
強襲部隊の先頭と二番目の隊員が
立ち止まること無くライフルを
棒立ちの３人に向けて音も無く射殺した。

１５「殺しと金と正義と」３

整備工場の敷地で警備をしていた３人を
流れるように殺したアルファゼロの６人は、
そのまま整備工場の側面に回り込むと、
土台を作って２人を屋根の上に登らせる。
地上に残った４人は
２人ずつに別れて表口と裏口に取り付く。
『こちらアルファゼロ。
ブラボーワン、
砂嵐に合わせて突入する。あとは任せろ。』
「了解。」
直後、砂嵐が訪れ、
視界を真っ暗にした。
サーマルビューに
切り替わったマルチサイトに

映るアルファゼロの隊員が
動き出した。
屋根の上の２人が天窓と換気口から
フラッシュバンを投げ込む。
整備工場の窓に激しい閃光が煌めき、
表口と裏口が開け放たれた。
４人は躊躇いもせず突入していった。
『…オー…クリ……』
砂嵐で無線にノイズが混じるが、
報告は聞き取れた。
突入してからここまでで
たったの数十秒。
あとは後続の部隊を待って帰るだけだ。
俺はエリックに見張りを任せて
荷物の片付けを始めるが、
微かな靴音を聞き取った。
下の階からで、

明らかにここの住人じゃない。
俺は階段から少し顔を出し、
サーマルビューで下の階の様子を見る。
見えたのはアサルトライフルを持った４人組で、
さっきまで俺とエリックが
居た部屋のドアをぶち破ると、
文字通りズカズカと乗り込んで行く。
俺はバックパックのポケットから
プリペイド携帯を取り出すと、
唯一登録されていた電話番号にコールする。
もちろん電話をとる人間など居らず、
直後に部屋の中の爆弾が爆発した。
周囲の窓ガラスが粉々に砕け散り、
爆破した部屋から
片腕の無い血塗れの男が出てくる。
「うっわぁ…
あんなグロいの久し振りに見たぜ…」

いつの間にか隣に来たエリックがそう呟くが、
俺に言わせれば『どの口が…』という感じだ。
「ま、地球でも見たけど」
「…だろうな。」
「あの男はどうすんだ?」
エリックはまだ生きている片腕の男を
顎でさすと首を傾ける。
俺はＡＫ７４を男に向けると、
ホロサイトの照準を男の頭に合わせた。
「殺すのか?」
「アイツの体、火傷がひど過ぎる。
どうせ助からない。」
サプレッサー付きのＡＫ７４が
パシュッと音を立てて
１発の５．４５×３９ｍｍ弾を撃ち出す。
男の頭が一瞬仰け反ったと思うと、
男はスイッチを切られたかのように崩れ落ちた。

アパートを出た俺たちが整備工場に向かって
アルファゼロと合流する頃には砂嵐も通り過ぎ、
あたりには薬莢やら死体やらが
砂まみれになって転がっている。
「終わったか？」
「ああ、だがあと１つ…」
アルファゼロの隊長はそう言うと腰に手を伸ばす。
俺とエリックは咄嗟に銃を隊長に向けるが、
俺たちを扇状に取り囲むように
立っていたアルファゼロの隊員が
それよりも早くライフルを構えた。
「どういうつもりだ。」
「…自分の目で確かめるといい。」
俺の問いにそう答えた隊長は、
顔を覆っていたマスクを外した。
「ーーッ！貴様ッ！」
マスクが隠していたその顔は日本人だった。

見覚えは無いが、身に覚えならある。
「逃げられるとでも思ったのか？
タカシ・シェオル。」
「俺を殺してどうする。
俺はもうエリア０１には近づかないぞ。」
俺の話を聞いているのかいないのか、
アルファゼロの隊員たちは俺とエリックの
武器を奪うとマガジンを外して分解し、
完全に無力化する。
「おい、そいつは結構高かったんだぜ。
汚れたらおたくらが洗ってくれる…うぐッ!?」
懲りもせず軽口を叩くエリックの腹に
隊員の１人がライフルのストックで打撃を与える。
「だが貴官の罪が消えたわけでは無いだろう？
貴官には２件のテロ容疑がかけられている。
意味はわかるな？」
隊長に向けられたＰ２２０…９ｍｍ拳銃の銃口が

俺の額をまっすぐ俺を向く。
「…だが我々の任務は貴官の抹殺では無い。
貴官らと会ったのも偶然だ。今回は見逃そう。」
「それはありがたいな…。」
「だが任務を邪魔されても困る。」
そう言うと隊長の９ｍｍ拳銃は腹を抑えて
うずくまっているエリックに向けられた。
「やめろッ!!」

パンッ…

「それでは我々はここで帰らせてもらう。」

アルファゼロは整備工場の
中に有ったバンに乗り込むと
砂埃を巻き上げて立ち去った。
残された俺は撃たれてから
動かないエリックに駆け寄った。
防弾ベストを外し、
シャツを捲り上げたところでおかしなことに
気がついた。
血が出ていない。
それどころかアザも無く、
汗しかかいていない。
俺は外した防弾ベストをもう一度見ると、
外側には弾頭がグシャリと潰れた９ｍｍ弾が
めり込んでいた。
「なーんてな。」
エリックはおどけた様子で起き上がると、
俺から防弾ベストを取って

撃たれた背中の部分を見る。
「どれどれ…
わーお、すっげーなぁ…！
やっぱ俺もベスト買おっかな。」
「エリック…お前ってやつは…」

16「殺しと金と正義と」4

その翌日、
俺とエリックはB．M．S．の社長室、
つまりベンの部屋で
事情聴取のようなものを受けていた。
「…つまりこういうことか？
無線に入ってきた声が
ウチの突入チームのコールサインを名乗り、
お前らをまんまと騙して
ロシアンマフィアのアジトから
”何か”を盗み出して行った。」
半信半疑と言いたげな表情で
応接机の向こう側に座る社長殿は腕を組むが、
俺だって自分が騙されてただなんて
未だに信じられない。

「ああ、でも社長。
俺らを騙したヤツらは日本人だったんだぜ？
０１にカマかけりゃ
なんかわかるんじゃねえのか？」
エリックの提案を聞いたベンは、
眉間に皺を寄せて思考を繰り返しているようだが、
おそらく無駄だろう。
ヤツらの装備を見ても
所属を示すものは無かったし、
使っていた拳銃も日本では大戦前に
正式採用の座を降りた謂わば骨董品だ。
それに何より顔を見せたのは隊長だけだから
身元を突き止めたとしても、
『ソイツは退役軍人だ。』と言われれば
何も言い返せない。
退役軍人なんて火星じゃほぼ確実に傭兵になって
どこかの誰かに札束積まれて戦ってる。

ベンも俺と同じ結論に至ったらしく、
報告書が映し出された端末を閉じて
事情聴取の終わりを予感させる。
「いや、俺も調べておく。
２人はしばらく警備部で仕事を頼みたい。」
「ああ、わかった。」
処分は意外にも警備部への配属に留まった。
事情も事情だし、
俺としてもこれ以上０１関連の事件に
巻き込まれるのも飛び込むのも御免被りたい。
俺は二つ返事で了承するが、
エリックはそうはいかないらしい。
「じょーだんだろ!?
スナイパーとレジェンドの息子に
ドーナツ食いながら違反切符切ってろってか!?
ベン、これじゃあいい笑い者だぜ?」
と、かなり興奮しながらベンに食ってかかる。

「そんなつもりは無い。
　それじゃあ効率が悪いからな。」
「はあ…？」
　警備部でしばらく平和に
　やっていくつもりだった俺は思わず声を上げる。
「まあいい、この際だ。
　もう任務内容のファイルを送信しておこう。」
　俺のことは完全に無視して話は進んで行き、
　ベンが端末を操作した直後に
　俺とエリックの端末がメールを受信した。
「なんだこりゃ？」
「…護送任務…？」
「そうだ。
　地球の方でアメリカに喧嘩売ったバカが
　エリア０４で捕まったらしい。
　ソイツを迎えに行ってくれ。」
「何かと交換か？」

「いや、そんな面倒な話じゃ無い。
本国はソイツを吊るし上げたい。
中国は面倒事を避けてアメリカに
恩を売りたい。そんな感じだ。」
そして端末をベンはデスクの引き出しを開けると、
「それと…」
今度は今時珍しい紙のファイルを
俺の前に滑らせて来る。
「本国の方から来た紹介状だ。」
「こんなの星間通信を使えば
すぐ準備できるじゃねえか。」
「それなんだがな…」
ベンは伸ばされた俺の手からファイルを
取り上げると、真剣な表情を浮かべる。
「ペンタゴンがわざわざ3ヶ月かけて
持って来やがった。
それだけ重要な人物のファイルなんだ。」

それを聞くと感じる重みが変わって来るが、
それに比例して好奇心も大きくなる。
だが今回の護送任務で運ぶ
テロリストのことも考えると、
とても国防総省だけで終わる話では無いはずだ。
おそらくもっと他の組織も…
「…ラングレーか？」
思考の中からこぼれ落ちた単語を口走った俺に
ベンは軽く2度頷いた。
「やりたく無いならこの話は断っておく。」
「……。」
「俺は乗った。」
黙り込んだ俺と逆でエリックは即答だった。
俺は普通の傭兵なら嫌がる
諜報機関絡みの仕事なのに
すぐに決断できたエリックの方を向く。
一体俺がどんな顔をしていたかは判らないが、

エリックは俺の疑問を察したらしい。
「俺はＣＩＡに１つ借りがあるんだ。
それに、今のうちにささっと返しときゃ
変なとこで取り立てられることも無さそうだしな。」
「わかった。俺も行こう。」
「それじゃあそういう事で。
２人は明後日にまずそのファイルの人物を
空港まで迎えに行ってから
護送部隊と合流してくれ。」
「わかった。」
俺は軽く手を振って了承の意を示すと
ファイルを受け取って席を立つが、
ベンに引き止められた。
「それと…そのファイルは持ち出すな。
ここで見て暗記しろ。」
やはりかなり重要な人物らしい。
俺とエリックは席に座ってファイルを開いた。

１７「再会」１

今の俺の感情は『驚愕』の一言に尽きる。
その原因となったファイルには
ほとんどが黒く塗り潰されたプロフィールと
１枚の顔写真が挟んである。
俺が驚いたのは顔写真の方で、
ポニーテールにまとめた金髪に茶色い両目、
シミひとつ無い真っ白な肌も
何もかもが以前見たときと変わっていない。
「…ナタリー…？」
「なんだタカシ？知ってるのか？」
「あぁ…まあ…な。」
だが唯一変わっているところは
「コイツ…オッドアイじゃ無い…」
両目が１年前と違って地球人のような

茶色になっていることだろう。
一緒に見ているベンも覚えているはずだが…
「なかなかいい女だな…。」
どうやら1年前の回し蹴りで
記憶がぶっ飛んだらしい。
だが忘れているならそれで良い。
俺は写真を見つめていた視線を
プロフィールに移した。
出身はアメリカのバージニア州、
父親と母親の名前は塗り潰されている。
俺は降り積もる苛立ちを隠しながら
ページをめくり、経歴を見た。
産まれたのは２０５５年４月１６日。
俺が産まれたのは２０５８年だから
３つも年上ということになる。
今は２０８０年で俺が２２歳だからアイツは２５歳。
こういう女を昔の日本では

アラサーというらしいが、
出身地と生年月日を出して親の名前を隠したって
身元の特定は出来る。
正直言うと生年月日すら怪しいとこだ。
後の文章は誰かさんが
インクをぶち撒けたと言われた方が
納得出来る有様だった。
年、地名、名前、所属した組織名、
有りとあらゆる名詞が真っ黒で、
こんなものを3ヶ月かけて運んできた
職員の事を考えると涙が出る。
俺はファイルを荒々しく閉じると
ベンのデスクに叩きつけた。
「これのどこがファイルだ。
大統領閣下がケツを拭いた
クソまみれのトイレットペーパーを
渡された方がまだ嬉しいね。」

「まぁ…いいたいことは分かる。」
どうせならホワイトハウスまで行って
大統領におんなじことを言ってやりたいが、
最速の船でも3ヶ月はかかる。
俺はファイルをもう一度手に取ると、
「機密保持だ。」
シュレッダーに突っ込んでベンの部屋を出た。

「…それで？
今回の俺は役目が無さそうだな。」
Ｂ．Ｍ．Ｓ．本部からほど近いバーのテーブルで
エリックがビール瓶片手に
カウンター席の方を見つめながら不満を漏らす。
「０４の中ではな。
途中の移動は開けた道が多い。
念のために狙撃銃を持って来てくれ。」
「へいへい…、
マスター、もう１本頼むっ！」
娼婦のような雰囲気の
女が座るカウンターの向こうで
コクンとこの店の店主が頷き、
カウンターの下からビールを取り出す。
「もういい加減にしとけよ？

明日は仕事だ。」

ーーーーカランカラン…

エリックの返事を遮るように
店の入り口にかけられたベルが
客の来店を知らせる。
「おっしゃぁ！今日は俺の奢りだぁッ!!」
「旦那!?オレらのぶんもいいんスかっ？」
「それを奢りって言うんだろーがよ！」
店の雰囲気とは正反対の物騒な男が
１０人近く流れ込み、
あっという間にカウンター席や
テーブル席を埋め尽くした。
どいつを見ても顔は赤いしフラついているが、
あの態度は必ずしも酔ったからでは無いだろう。
「…多いな。エリック、もう出るぞ。」

「ダメだ、タカ…！」
「…？」
　席を立とうとした俺を制止するエリックの手には、
　いつの間にかカスタムガバメントが握られている。
「おいやめろ…！銃をしまえ…！」
　俺は男たちに聞こえないよう小声で宥め、
　一度は浮かせた腰をもう一度降ろした。
「一体どうしたんだ？」
「…あの女…絡まれたら逃げられないぜ…？」
　俺は背後のカウンター席を見る。
　先ほどから幾度となく
　ため息を吐いている女が座るのは
　店のカウンター席の中でも一番奥にある席で、
　出口まで行くには７～８人の男たちの間を
　通らなければならない。
「ならどうするんだ？」
「…悪い、先に帰っててくれ。」

まだ組んで1週間も経っていないが、
エリックの正義感の強さには感服した。
逆に俺の道徳心が欠落してるとも言えそうだが、
ここで仮とはいえ相棒を見捨てる決断が
できないところを見ると、
俺は自分がまだまだ甘いということを
実感させられる。
「そんなことできるか…！
ったく…表に車回しておけ。」
俺は鍵と代金を胸ポケットから取り出すと、
エリックに握らせて席を立った。

男たちに睨まれつつ最短距離で女の座る席へ近寄り、
隣の席に腰を下ろした。
「なに？
客なら取らないわよ、
今日はそんな気分じゃ無いの。」

開口一番かなり失礼な勘違いをされたものだが、
娼婦の横に小金持ちが座れば
そう思われてもしょうがないのだろう。
「まず先に言っておく。
そんな要件じゃない。それと…俺はＢ．Ｍ．Ｓ．の者だ。
ちょっと協力して欲しいことがある。」
俺は財布から１００マーズドルを何枚か出して
彼女の前に滑らせ、
「これは前金だ。それと…俺の名刺も。」
それに続いて２５セント硬貨を２枚、
名刺とともに渡す。
「…随分と羽振りが良いわね…」
「今のうちだけさ。
それより…返事はどうなんだ？
こっちは急いでるんだ。」
「そんなに急かすと女が寄り付かないわよ？」
余計なお世話だが、

彼女が代金をマスターに払って
バッグを肩にかけたところを見ると
どうやら成功したらしい。
酔っ払いの間を彼女とともに一歩、また一歩と
少しずつ歩速を上げながら通り抜けて行くが、
途中で俺の前を歩く彼女が
酔っ払いの1人にぶつかり、
ソイツはその拍子に持っていたグラスを落とした。
これがマーフィーの法則か、と思ったのもつかの間。
カウンター席の中でも
最も出口に近い席に座ったヤツが
立ち上がり、出口を封じた。
「ごめんなさい。」
「なぁネエちゃん、
結構良い身体してんじゃねえか。
酒のことなんてどうでも良いから
オレらと遊ぼーぜ？」

彼女は男から顔を背け、
「それはムリね。…先客が居るから。」
と言って俺を顎でさした。
「おいおい…そりゃねえだろ…」
俺は呆れかえって天を仰ぐが、
神は火星のことなど眼中に無さそうだ。
俺は右手をポケットに突っ込んで
メリケンサックを探り当てると上着に下で
こっそりと右手に装着する。

「やっちまえッ!!」
酔っ払いの中の1人がそう叫んだせいで
喧嘩が始まった。
『戦争はたった1発の銃弾で起こせる。』という言葉を
我々の先祖は残したが、
まったくもってその通りだ。

軍隊すら経験した事が無いであろう
酔っ払いの傭兵もどきに呆れるのもつかの間、
背後の男が拳を振り上げて殴りかかって来たが、
俺はその初撃をオッドアイの
並外れた動体視力を活かして回避し、
そのまま膝蹴りを腹に叩き込んでまず1人目。
今度は前の男がビール瓶を握って立ちはだかり
左右の男たちが俺を羽交い締めにするが、
俺はビール瓶を持った男が
瓶を振り下ろすのを見計らって
俺の右手を抑える男の足を踏みつけて盾にする。
ビール瓶は盾にした男の頭で粉々に砕け散り、
これで2人目。
自由になった右手のメリケンサックで
瓶を持っていた男に右フックをかまし、
左腕を抑える男にもアッパーをお見舞いして
さらに2人。

あと残るは６人だが、
男たちはナイフを取り出して
カウンターの影に隠れていた娼婦の女を
引っ張り出すと人質にした。
「近づくな！
近づいたらコイツの首を掻き切るからなッ！」

１８「再会」２

「近づくな！
近づいたらコイツの首を掻き切るからなッ！」
刃渡りが２０ｃｍ近くあるナイフの刃が
女の首に当てられ、鈍く輝く。
「わかったわかった、落ち着け…」
俺は両手を上げてメリケンサックを投げ捨てると
無抵抗の意を示す。
まぁまだ武器は隠し持っているが、
追い込まれた状況で眼に映るもの以上の脅威を
想定して対処できる人間なら、
今ここにエリックが居ないことに気付くはずだ。
「よぉし…良いぞ…
そのまま動くんじゃねえぞ…？」
だがそれに気付く様子が無いという時点で

俺の勝ちだ。
男たちの背後のドアがゆっくりと開き、
Ｍ８７０を持ったエリックが忍び込んでくる。
助けに戻ることを予想してはいたが
指示した覚えは無いので
エリックがどんな装弾を仕込んできたかは不明だが、
この酔っ払いどもと一緒に
ミンチになるのは御免被る。
できれば非致死性であることを願いたい。
俺はエリックとアイコンタクトを取り、
俺から見て右側の３人を頼むと俺の担当になる
左側の２人と人質を取っている
真ん中のヤツを確認した。
どいつも俺とエリックの動きには
気づいていないらしい。
俺は始まりの合図でエリックに軽く頷いて見せると、
エリックは近くにいた１人をストックで殴りつけ、

２人目にＭ８７０を向けて撃った。
ショットガンの凄まじい銃声が壁で反響し、
それに反応した全員が動き出す。
俺は腰に挿していたＨＫ４５を抜き取ると
人質をとる男がナイフを握る
右肩を狙って１発撃った。
「ぎゃあ”あ”あ”あぁぁぁッ!!」
俺は空かさず４５口径の衝撃で
体勢を崩した男との間合いを詰めて
人質の彼女から引き剥がすと床に蹴飛ばす。
俺は男の風穴の開いた右肩を踏みつけて動きを止め、
残りの２人に銃を向けた。
「悪いが非致死性の武器は持ってないぞ?
まだやり合うなら死ぬ覚悟で来い。」
２人はお互いの顔を見て
冷や汗を浮かべながら後退りすると、
俺に肩を踏まれている男を残して店を出て行った。

「お前も行けよ。」
　俺は１人とり残された男の肩から足をどかしてやると、
「…く、クソッタレが…覚えてろよ…！」
　男はそんな捨て台詞を吐いて逃げて行った。
「悪いタカ、遅くなっちまった。」
「いや、タイミングはちょうど良かった。」
　喧嘩の余韻を残す店内に残された俺たちが
　短く声を掛け合う所へ事の発端の一部である女が
　カウンターの影からひょこっと現れた。
「…あんたら一体何者なの？」
「…ただの傭兵だ。色々とワケありだがな。
　それより君は？なんて名前なんだ？」
「私の名前は…」
　俺はボケっと女を見つめて動かないエリックを
　見かねて女に名前を聞くが、
　以外にもその答えはエリックの口から出た。
「ケイト…、ケイト・サラザール…？」

「ーーッ!!」
彼女はその名前を聞いた途端に血相を変えて
エリックに飛びかかって馬乗りになると、
近くに転がっていた割れたガラス瓶を手にとって
エリックの首に押し当てた。
「なんであんたがその名前を知ってんのッ！」
「…覚えてないのか…!?
俺だ、エリックだ！一体何があったんだ！
君のお父さんはずっと心配してたんだぞ！」
「あんたに…あんたに何がわかるっての…？
あんな人、死んじゃえばいいのよ！」
彼女のガラス瓶を握る手に力が入り、
エリックの首に浅い傷を付ける。
「落ち着け、エリックから離れろ。」
俺は怒鳴り散らす彼女を宥めようと声をかけるが、
聞く耳を持たない。
「うるさい、うるさいうるさいうるさいッ!!

あんたらなんか殺してやる！
パパもみんなも全員死んじゃえッ！」
もはや錯乱状態で叫ぶ彼女には誰の言葉も
届かないだろう。
俺は足首に巻いたホルスターからテイザーガンを抜き、
火傷の痕が残らないよう彼女のドレスに
照準を合わせて引き金を引いた。
オモチャの火薬銃のような乾いた破裂音で
２本の電極が飛んでいき、
彼女の背中に取り付くと同時に電流を流す。
声にならない悲鳴を上げながら
体を硬直させて身を仰け反らせ、
電流が止まると同時に脱力して床に仰向けに倒れた。

「エリック…彼女を知ってるのか？」
「…ああ、知ってる。
　でも前はあんなんじゃなかった…。」
　ジープの中で後部座席に横たわる亜麻色の髪の女を
　横目で見ながらエリックと話す。
「それはどうでもいい、彼女は一体何者なんだ？」
「…彼女の父親は
　合衆国宇宙軍第３艦隊のサラザール提督だ。
『海賊殺し』って名前の方が有名な
　そいつのひとり娘が彼女、ケイト・サラザール。
　ケイトは…２年前に誘拐されたんだ…」
「人身売買か？」

「わからない…
　でもサラザール提督はケイトが
　行方不明になってから宇宙軍を退役した。」
「脅されてたってことか…。」
　エリックは助手席で眉間に皺を寄せ、
　何かを決断したように俺の方をみた。
「タカ…、俺にケイトの面倒を
　看させてくれないか？」
　予想はしていたが、やはりそうきたか…
　エリックの様子からして
　以前に彼女と何かあったようだが、
　かなり深い関係のようだ。
「迷惑かけるのはわかってる…
　代わりのヤツを出せるほどの人脈なんてまだ無いし
　何よりここじゃあんたのバディだ。
　それでも…」
「いい、それ以上は言うな。」

俺はエリックの言葉を遮ってそう言い、
ため息を1つつく。
「いくら落ちぶれてもその女にはまだ価値がある。
絶対に傷つけるなよ?」
「…ふっ…」
「なっ!?」
かなり真面目に答えただけあって鼻で笑われると
ショックを受けるのだが、
「もっと正直に言えねえのかよ。
でもまあ…ありがとう。」
理解されているようで少し安心した。